

北海学園札幌高等学校 令和6年度 WWL コンソーシアム構築支援事業 成果概要図

事業概要

広大な大地『北海道』の全地域において SDG s に取り組んでいる高等学校と海外の高等学校、大学、関連機関を繋ぎ『北海道広域 AL ネットワーク』を形成し、組織的・継続的に持続可能な世界の実現と Society5.0 を牽引するグローバルリーダー育成を目的とする。具体的には SGH 事業の研究成果をベースに連携校の多様な視点と実践を活かし、距離と時間を克服するため ICT を活用した新たな科目・授業を実施する。更には専門的で先進的な技術を有する系列大学や連携機関の指導助言により、教育カリキュラムを進化させる。特に北海道の農業と食、民族や領土問題、寒冷地の住まいと環境、外国人労働者を支えるネットワーク構築を探究課題とした『グローバルリーダー』育成モデルの確立と北海道広域 AL ネットワークの拡充を図り、世界に向けて発信する。



成果

- ① SDG s 実現に向けた一定の方向性の確立 → チャレンジ精神を持って、SDG s に取り組む姿勢。
- ② 他者とのコラボレーション力 → 国籍・性差等あらゆるフィールドの方々との協働。
- ③ 読解力、表現力の向上 → 提供された資料から、自己のアイデアやプランをプレゼンテーション。積極的な英語運用（スピーチ・プレゼンテーション）。
- ④ 科学的思考力・客観的判断力の増加 → 実習・実験による科学的見地から論理的思考・的確な判断。
- ⑤ リフレクション能力 → 自己の言動を見つめなおし、未来を構想する自己。

事業成果概要

【SCIENCE IN ENGLISH】5月

北海道大学にて、山中康裕教授による特別講義。実験から数値シミュレーションを学び、英語でのグループワークを通じ環境科学を考えました。

【GLOBAL VILLAGE】5月

1年生を対象とし国際理解・多文化共生・SDG s を内容とするプログラムを2日間にわたって実施。北海道大学大学院教授の山中康裕先生の講義をはじめ、栗山町・南富良野町でのフィールドワーク、北海道大学留学生との交流を通じて、グローバル社会に生きる決意を深めました。

【住み続けられるまちづくり×農業～学校の空地で野菜栽培～】5月～酪農学園大学の飛谷淳一准教授によるご指導のもと『農業フィールドワーク』を始動。収穫した野菜は販売し、収益金の一部を国際協力活動に充てました。

【台湾コンコーディアハイスクール受入事業】5月

台湾 CMS 生徒と、茶道・折り紙・少林寺拳法・和菓子作り・日本語授業と一緒に体験しました。パティ募集には応募が殺到し、抽選となりました。

【ニュージーランド交換留学】5月、8月、9月

5月から8月にウェリントンから留学生が来日し、8月は本校生徒1名が、9月には6名の生徒がウェリントンで学びました。

【台湾語学研修旅行】7月

コンコーディアハイスクールを訪問し、交流。施設見学・ホームステイを通じて日台の歴史・現在を学びました。

【北海道平取高等学校 PRESENTS

探究！アイヌ民族の生活・文化】8月

大地連携ワークショップを見学し、平取町立二風谷アイヌ文化博物館見学。その後は北海道平取高等学校にて平取町教育委員会の関根健司さんからご講話いただき『アイヌ文化』についてのワークショップを行いました。

【実践!!フードロス削減に向けて】10月

札幌保健医療大学にて、荒川義人教授・百々瀬いづみ教授による特別講義・収穫・活用体験（調理実習）・ワークショップ・イメージマップ作成・成果発表を実施しました。

【北海道白老東高等学校 PRESENTS

-歴史と SDG s をつなぐ- 共同学習】10月

北海道白老東高等学校の総合探究プログラムに参加。国立アイヌ民族博物館ウポイ見学の後、白老東高の生徒さんによるガイドのもと仙台藩元陣屋資料館を見学し、意見交流をしました。

【ENGINEERING LABO】10～12月

北海学園大学工学部に出向き、講義を受け、実験を行います。4コースから選択し、工学的な観点から SDG s を学びました。

【根室高等学校・北方領土復帰期成同盟による

北方領土について考える講義】10月

北海道根室高等学校の北方領土根室研究同好会によるオンライン研究発表会。同好会の皆さんの日頃の活動・熱い思いが視聴生徒にも伝わり、北方領土への関心も一層高まりました。

【ポートランド研修旅行】10月

3週間のポートランド研修。大学での授業・ホストファミリーとの生活等、貴重な経験となりました。帰国後、英検にチャレンジする生徒が増えています。

【探究活動成果発表会 兼 高校生国際会議】12月

拠点校生徒・連携校生徒による1年間の探究成果発表会。高校生国際会議では、山中教授による特別講義の他、ファシリテーターの母国(グローバルサウス 12ヶ国)が抱える問題をテーマに分科会を重ね、全体会で提言を行いました。



令和 6 年度
WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業
～Snow Crystal Project in HOKKAIDO～
カリキュラム開発拠点校 北海学園札幌高等学校
ニュースレポート 第 1 号 2024（令和 6）年 4 月 12 日（金）

名古屋大学教育学部附属中・高等学校主催 『2023 年度 WWL 生徒研究発表会』へ参加

2024 年 3 月 27 日（水）に名古屋大学豊田講堂で行われた、名古屋大学教育学部附属中・高等学校主催の『2023 年度 WWL 生徒研究発表会』に本校生徒 2 名が参加してきました。

本校と連携校である名古屋大学教育学部附属中・高等学校さんは、昨年 12 月に本校で行われた『探究活動発表会』へもご参加いただき、お互い離れた場所ではありますが交流を深めております。

発表会では口頭発表・ポスター発表・オンライン発表の 3 部門のうち、本校チームはポスター発表の部門に参加しました。約 70 チームが参加するポスター発表部門の中で、本校チームは『MR 技術を活用した北海道の農業

後継者問題の解決』をテーマに、名古屋大学附属高の生徒さんをはじめ、連携校・関連校 8 校他多くの生徒さん達と一緒にセッションが行われました。MR 技術の応用や、AR・VR 技術の違いなど、興味深い議論が交わされる中、大学院生や道外からの参加者からの質問やフィードバックは本校生徒達の研究に対する新たな視点を与えてくれました。この経験・体験は生徒達の理解を広げただけでなく、自分達の探究を進める上でたくさんの人々とのセッション・繋がりが重要である事を感じたのではないのでしょうか。



【会場となった名古屋大学豊田講堂】



【ポスター発表する生徒達】

参加した生徒達はこのイベントを振り返り、様々な学びの分野のコミュニティと関わる貴重な機会に参加出来た事を感謝し、この経験から新しい考え方や洞察力を得ることが出来た事をあげ、今後の活動や学習に活かしていきたい！と意欲を見せてくれました。この経験は生徒達の将来につながり、活躍してくれることでしょう。

最後にこのイベントにお誘いいただき、貴重な機会を提供してくださいました名古屋大学教育学部附属中・高等学校の皆様、関係者様、ご協力を賜りました皆様に心よりお礼を申し上げます。



令和 6 年度

WWL（ワールド ワイド ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
～Snow Crystal Project in HOKKAIDO～
カリキュラム開発拠点校 北海学園札幌高等学校

ニュース リポート 第 2 号 2024（令和 6）年 5 月 27 日（月）

台湾嘉義市コンコーディアハイスクール来校

本事業の連携校である台湾嘉義市のコンコーディアハイスクールから生徒 34 名が来校しました。

また、同校のマーク ファン校長先生、ブルース ヤン先生が来校されました。

マーク校長先生と本校竹越校長先生とが事業連携の意義と継続の大切さについて話し合いを行い、その後、交流事業を行いました。

午前は、3 年 C 組の杉本さんによるウェルカムスピーチで始まり、アイスブレイク、日本語授業、クッキングを行いました。午後は日本文化研修の時間として、茶道、折り紙、少林寺拳法体験を実施。最後は、2 年 C 組の久保さんによるフェアウェルスピーチで終了しました。再会を願って本プログラムを終了しました。

来る 7 月 25 日から、本校生徒がコンコーディアハイスクールを訪問し、語学と文化にふれる研修を行う予定です。本校にとって 6 度目の台湾研修となります。





令和6年度

WWL（ワールド ワイド ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
～Snow Crystal Project in HOKKAIDO～
カリキュラム開発拠点校 北海学園札幌高等学校

ニュース リポート 第3号 2024（令和6）年5月28日（火）

21th GLOBAL VILLAGE 2024

5月23日（木）・24日（金）に新入生を対象とした国際理解・SDGs理解のためのプログラムであるGLOBAL VILLAGE 2024が行われました。

23日は北海道大学大学院教授で、WWL Snow Crystal Project in HOKKAIDOの運営指導委員長でおられます山中康裕先生がSDGs特別講義を行いました。このなかで山中教授は世界のSDGsに関する研修や活動の一端を紹介しながら、日々の生活のなかで持続可能な社会作りを意識して生きることの大切さをお話されました。講義を受けて生徒達は各ホームルームにおいてワークショップを行い、学びの成果を発表しました。



24日は、栗山町において5つのコースに分かれ、企業や高等教育機関、農園、地方自治体SDGsの活動を学びました。そして、南富良野町において、ラフティングを楽しみ、同時に北海道の自然を体感しながら、自然環境をいつまでも大切にしていこうという思いをあらためて強く抱きました。また、同日、北海道大学から19名の外国人留学生・研究者、N.Z.から本校に留学中の生徒も参加し、国際交流にも楽しく取り組みました。





令和6年度

WWL（ワールド ワイド ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
～Snow Crystal Project in HOKKAIDO～
カリキュラム開発拠点校 北海学園札幌高等学校

ニュース リポート 第4号 2024（令和6）年5月29日（水）

第1回 農業フィールドワーク実施

WWL農業フィールドワークの1回目を5月27日（月）に、本校敷地内の畑と酪農学園大学で実施しました。

WWL Snow Crystal Project in HOKKAIDOの運営指導委員でおられる酪農学園大学准教授の飛谷淳一先生のご指導のもと今年のかぼちゃ2品種、「えびす」と「ほっとけ栗たん」の比較栽培に取り組めます。



同日午後、本校敷地内の畑に堆肥を混ぜ込み、その後江別市の酪農学園大学に移動し播種作業を行い、堆肥作成場を見学しました。さらに、飛谷先生と小八重先生の研究内容の一端にふれ、大学生による研究生活を垣間見る機会にも恵まれました。



今回、引率した事業拠点校の沼田彩花教諭によると、3年間継続して参加している生徒の成長を実感することができたこと、普段、土に触れる機会が少ない生徒にとってとても有意義な探究活動であること、飛谷先生小八重先生による「健土健民」の考えに深く共感する生徒が大勢いたとのことでした。

これから秋まで数ヶ月にわたって取り組めますが、多くの生徒の積極的な活動が期待されます。





令和 6 年度

WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業 ～Snow Crystal Project in HOKKAIDO～

カリキュラム開発拠点校 北海学園札幌高等学校

ニュースレポート 第 5 号 2024（令和 6）年 6 月 24 日（月）

SCIENCE IN ENGLISH ～英語を用いた科学ワークショップ～

5 月 18 日（土）、北海道大学大学院環境科学研究院にて運営指導委員長の山中康裕先生による『SCIENCE IN ENGLISH～英語を用いた科学ワークショップ～』が開催されました。

事前にポスター掲示や連携校への案内を行い、当校から 14 名、連携校等から 5 名が参加しました。「英語で学ぶ」事から、英語での講義になる事に不安や苦手意識がある生徒へ、山中先生自身も元々は英語が苦手だったことや、何度もチャレンジしていけば伝わるようになり、コミュニケーションがとれる事になる！とご自身の経験談を伝え、応援メッセージを送って下さいました。

午前中は「JR タワーからボールを落としたり、何秒かかるか」という問題に対して研究院の建物の 8 階からボールを落とし、数値シミュレーションをする…という実験と、結果をもとにグループワークを行いました。実験は、ボールを落とすチーム、ボールの着地を計るチームに分かれ、それぞれ息を合わせ楽しそうに計測する生徒達が印象的でした。その後、山中先生からガイダンスがあ

ったスプレッドシートを使い、計測から空気抵抗の値を出し、JR タワーから落下させた時の予測を計算しまし

た。時折出てくる専門用語の英単語も、グループに参加して下さっているアシスタント講師のフォローを受け、みんな真剣な表情で学んでいました。

午後は午前中に学んだ数値シミュレーションを使って、気候変動・人口予測を考えました。地球温暖化が続く事でどんな影響があるのか、CO2 が減らない現状をどんな行動で解決していくのか、人口が減っていく今、どのように仕組みを変え、どのように将来増やしていくのか…。様々な問題を考え、個人が起こす行動は小さなものであっても、いつか世界規模に繋がるのだという事を確認

し、今回のワークショップは終了となりました。

この SCIENCE IN ENGLISH にご協力下さいました山中先生をはじめアシスタント講師の皆様、グラフィックレコーディングをご指導下さいました水口様、ご参加下さった連携校の皆様へここにお礼申し上げます。ありがとうございました！



8 階にいるチームとコンタクトを取る生徒達



グループワークで数値シミュレーションを学びました。





令和6年度

WWL（ワールド ワイド ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
～Snow Crystal Project in HOKKAIDO～
カリキュラム開発拠点校 北海学園札幌高等学校

ニュース リポート 第6号 2024（令和6）年8月27日（火）

北海道平取高等学校PRESENTS WWL探究！アイヌの生活・文化 実施

8月23日（金）、事業連携校である北海道平取高等学校が主幹となり、アイヌの生活や文化を学ぶ機会が設けられ、本校から26名の生徒が参加しました。また、WWLに興味があると、北海道大学大学院生の河合さんも参加されました。

今年はプログラムの中に新たな内容を盛り込みました。

全国から応募してきた大学生の皆さんが平取町で5日間過ごし、アイヌ文化振興とまちづくりを考える「大地連携ワークショップ」が行われていて、大学生の皆さんのプレゼンを見学しました。アイヌ文化の普及、アイヌの芸術のPR、アイヌの言葉の学習振興といった観点から多くの提言があり、いずれのプレゼンも興味深い内容でした。3年生にとっては、総合系や推薦系入試の参考にもなったことと思います。

ワークショップ見学後は、二風谷アイヌ文化博物館を見学し、アイヌの生活、芸術、文化全般について展示品を見ながら、当時の生活をイメージしました。また、午後のワークショップにおいて話題にすることに留意しながら見学を楽しみました。

昼食後は二風谷ダムを見学してから平取高等学校を訪問しました。まずはアイヌ研究でとても有名な関根健司先生によるアイヌ文化に関する講話をお聞きしました。そして、その後は、両校生徒が6つのグループに分かれてワークショップを行い、アイヌ語とアイヌ文化の普及・振興について、関根先生のお話も参考にしながら、できることを高校生の視点で話し合い、最後に発表して内容をシェアしました。

SDGsや多文化共生を考えると、身近な地域と身近な人から学ぶことは非常に大切だと考えます。





令和 6 年度
WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業
～Snow Crystal Project in HOKKAIDO～
カリキュラム開発拠点校 北海学園札幌高等学校
ニュースレポート 第 7 号 2024（令和 6）年 9 月 25 日（水）

『FOOD LOSS 削減 How to Use Up!』

8 月 22 日（木）、本校のメディカルプレップコース進学希望の 1 年生を対象に札幌保健医療大学にて荒川義人教授による特別講義、学生さんからの講話、活用体験（調理実習）に行って来ました。54 名が参加し、2 グループに分かれそれぞれのプログラムを体験。一日を通して SDGs GOAL2「飢餓をゼロに」の目標達成に向け学習しました。

荒川義人教授による講義『北海道産農産物の特性を知ろう！』

北海道の農畜産物の地域特性は気候の違いによって様々な種類があり、道産の農畜産物は全国区の銘菓や加工品等の原材料として支えている事を聞き、生徒たちは興味深く聴き入っていました。また道産のお米・大豆・小豆・じゃがいも等のそれぞれの成分特性をご講義いただき、その中でも札幌発祥である「札幌黄」と言われるたまねぎ、「札幌大球（たいきゅう）」と言われるキャベツの歴史を知り、現在もその歴史を受け継ぐべく農家の方々は日々研究・開発をされている事を学び、農業の苦労や大変さも感じたのではないのでしょうか。



札幌保健医療大学生による野菜の講話とベジチェック体験



札幌保健医療大学の学生さんが、当日の調理実習で使われる野菜の特性をお話ししてくださいました。実は普段捨てられている皮の付近に栄養が多く含まれていることや、お店で売られている野菜の鮮度の見分け方、保存方法等、身近なお話をしていただき生徒達は驚きの声をあげたりしながらも楽しそうに学んでいました。講話の後百瀬教授から、普段自分たちがどれだけ野菜を摂取しているか…

「ベジチェック」と言う機械で計測してみよう！と、計測体験を行いました。12 段階の摂取レベルに分けられ、約一か月前の野菜摂取量がどれくらいなのか。一日に必要な野菜摂取量のレベルが 7～8 でしたが、なかなか基準に達する人がおらず、自分たちがいかに野菜不足の生活をしているかを実感していました。これを機に日頃から野菜摂取を気に留めて、野菜を食べる事が増えるでしょう。



活用体験（調理実習）

フードロスを実践。普段は捨てがちな葉や皮も使い、今回作るのは、炊き込みご飯・カブの葉とにんじんの和風スープ・カブの肉みそ炒め・たっぷりかぼちゃマフィンの4品です。サクサクと野菜を切っていく生徒、かぼちゃを見つめどこから切るのか悩んでいる生徒、慣れない手つきの包丁さばきにドキドキしながらも真剣に取り組む生徒たちの姿に、普段教室では見られない表情が見られました。2時間程で完成・実食。自分たちが作った物と、他の班が作った物と、食材の形や煮込んだ色が違ったり様々でどの班からも「美味しそうに出来た！」と声が上がっていました。実食も皆、しっかりと味わい嬉しそうに食べていました。



グループ討議と全体討論



今日学んだ体験をまとめるグループ討議。生徒たちは9つの班に分かれ、感想や意見を模造紙に書くグラフィックレコーディングを行いました。それぞれ印象に残った事を話し合い、「あのアイスクリームの原料が北海道産だったなんて！」「ベジチェックで最高レベルだったのは私！」「実より皮の方が栄養があるとは知らなかった」等様々な意見を出し合い、取り組んでいました。その後、班ごとに出た意見をまとめ1分程度スピーチ・発表をしました。12月の高校生国際会議での発表に向け、今日の体験をより一層探究し取り組んでいくことでしょう。

最後に生徒たちから、今日の企画にご協力くださった荒川教授、百瀬教授へお礼の挨拶をし、すべてのプログラムが終了となりました。今年度も貴重な機会を提供してくださいました荒川教授、百瀬教授、札幌保健医療大学の学生の皆様に心よりお礼申し上げます。





令和6年度

WWL（ワールド ワイド ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
～Snow Crystal Project in HOKKAIDO～
カリキュラム開発拠点校 北海学園札幌高等学校

ニュース リポート 第8号 2024（令和6）年10月16日（火）

10月11日 北海道白老東高等学校PRESENTS 『歴史とSDGsをつなぐ』実施

昨年度に引き続き、WWL事業連携校である北海道白老東高等学校主導による共同探究機会である『歴史とSDGsをつなぐ』を10月11日（金）に実施しました。両校生徒ご対面を経て、混成グループ単位で民族共生象徴空間ウポポイを見学し、屋外の施設を見学し、昼食を一緒にとりました。



アイヌの文化や生活の優れた点、芸術的な点を中心に直接体験することができたこと、しかも生徒間での交流を深めながら学ぶことができたことは、高校生活における貴重な機会になったことと思います。



価値観の多様化が進むなかで、こうした歴史的に重要な文化をしっかりと守っていく、つないでいくことが次世代には重要な概念です。当事業に参加した生徒には頼もしさを感じずにはられません。



午後は、白老町内の仙台藩白老元陣屋資料館を訪問し、見学しました。白老東高校の3名の高校生ガイドの方々は休日に同資料館でボランティアガイドをし、一般のお客様のガイドをしているとのこと。頑張っている高校生を見てると勇気を与えてもらいます。

また、昨年度に引き続き、同校の志田先生によるガイドも相変わらずのプロフェッショナルぶ

りで、先生の唱える歴史物語の世界に引き込まれてしまいました。

鎖国を続けるべきか、外国の文化をいち早くとり入れて、国が新たな歩みをはじめるか、そんな時代において先見の明を備え、生きた蝦夷地警備の責任者三好監物の人生にふれることもまたSDGsの時代をつくっていくにあたり、とても大切なことであると実感しました。

北海道の歴史、アイヌの文化について、体験を通じて学び、白老東高等学校と北海学園札幌高等学校生とが学びの成果を相互に語り合い、SDGs社会を築いていくことの大切さを認識する。この思いをいっそう強くさせてくれる機会が、「歴史とSDGsをつなぐ」であると、今年度も強く感じました。





令和6年度

WWL（ワールド ワイド ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
～Snow Crystal Project in HOKKAIDO～
カリキュラム開発拠点校 北海学園札幌高等学校

ニュース リポート 第9号 2024（令和6）年12月16日（月）

WWL コンソーシアム構築支援事業 Snow Crystal Project in HOKKAIDO 探究成果発表会・高校生国際会議実施

12月12日（木）、13日（金）に北海学園大学を会場として
4回目となる探究活動成果発表会と高校生国際会議を実施しました。

発表会には事業拠点校と事業連携校とを合わせて19チームが
これまでの探究成果を発表しました。発表の後には、山中運営指導
委員長、佐藤運営委員から評価コメントをいただき、事業協働機関
の上村委員より評価コメントをいただきました。

北海道各地において高校生が地域特有の事象を探究している状況を
共有することができ、今年度も非常に有意義な機会となりました。

12日の午後および13日の終日、WWL 高校生国際会議を実施
しました。山中教授による SDGs 講義、12カ国を訪問して、日本
の高校生がグローバルサウスが抱える社会課題に対して提言を行う
VISIT THE WORLD と、課題整理と提言文作成を行うワークショッ
プを行いました。そして、最後に提言を7チームが行い、根岸教授
にまとめとしてお話をいただきました。

10校200名参加の高校生国際会議を無事終了することができま
した。長野県教育委員会、福島県ふたば未来学園の皆さまにもたく
さんのご協力を賜りました。

皆さま、ありがとうございました。



運営指導委員会・検証委員会・AL ネットワーク連絡調整会議

小林 真史

1. はじめに

本年度の WWL コンソーシアム構築支援事業 Snow Crystal Project in HOKKAIDO が、完成年度でもあり、それまでの 3 年間実施してきた各事業を確実に実施することと、12 月 12 日、13 日の WWL 探究活動報告会兼 WWL 高校生国際会議を実り多き機会とすることを確認する目的として運営指導委員会・検証委員会および AL ネットワーク連絡調整会議を実施した。

2. 報告

本年度、実施した運営指導委員会、検証委員会、AL ネットワーク連絡調整会議は以下のとおりである。

①第 1 回 運営指導委員会 運営指導委員長との打ち合わせ

日時 令和 6 年 5 月 23 日（木） 午後 2 時から午後 4 時

会場 北海学園札幌高等学校 2 階 校長室

②運営指導委員 酪農学園大学 飛谷淳一准教授と事業運営のための会議

日時 令和 6 年 5 月 29 日（水） 午後 4 時から午後 5 時 30 分

③第 2 回 運営指導委員会 AL ネットワーク連絡調整会議

日時 令和 6 年 7 月 4 日（木） 書面において当年度の事業を案内・了承

④運営指導委員長 山中康裕 北海道大学大学院教授との高校生国際会議実行委員会

日時 令和 6 年 9 月 25 日（水） 10 月 17 日（木） 10 月 25 日（金）

11 月 5 日（火） 11 月 18 日（月） 11 月 26 日（水） 12 月 5 日（木）

12 月 9 日（月） いずれも午後 5 時から午後 6 時

⑤第 3 回 運営指導委員会

日時 令和 6 年 12 月 12 日（木） 午前 8 時 30 分から午前 8 時 50 分

会場 北海学園大学 7 号館 402 教室

内容 令和 6 年度 Snow Crystal Project in HOKKAIDO の各事業報告・分析・総括

⑥検証委員会

日時 令和 6 年 12 月 12 日（木） 午前 8 時 30 分から午前 8 時 50 分

会場 北海学園大学 7 号館 402 教室

内容 ・令和 6 年度 Snow Crystal Project in HOKKAIDO の各事業の点検と評価
・参加生徒による提出レポートおよび実施アンケートの点検

⑦AL ネットワーク連絡調整会議

日時 令和 6 年 12 月 12 日（木） 午前 8 時 30 分から午前 9 時

会場 北海学園大学 7 号館 402 教室

内容 ・令和 6 年度 Snow Crystal Project in HOKKAIDO の各事業報告
・探究活動発表会の進行・講評・撮影について
・高校生国際会議の進行・講評・撮影について
・令和 7 年度事業予定（自走策の検討）

以上

ニュージーランド ウェリントンハイスクール生徒中期受入事業

小林 真史

1. はじめに

令和6年5月11日（土）から同年7月5日（土）にかけて、事業連携校のニュージーランド ウェリントンハイスクールから2ヶ月にわたり事業拠点校に中期留学生として MCPHERSON NATHAN を、事業連携校の北海道高等学校が TRUGLY BENJAMIN を受け入れた。

ここでは、事業拠点校における中期留学生受入事業について報告する。

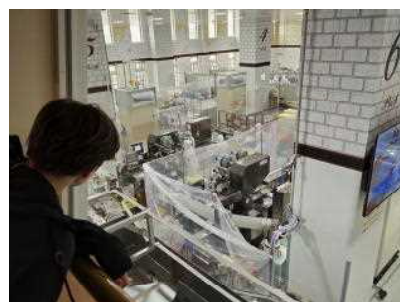


2. 報告

事業拠点校において受け入れた MCPHERSON NATHAN はウェリントン ハイスクールの日本語クラスに在籍する生徒であり、日本語・日本文化を積極的に吸収しようと努めた2ヶ月の滞在であった。

平日は事業拠点校2年生の久保友香さん宅にホームステイし、週末は同校に勤務する小林の自宅にホームステイした。

滞在当初は、緊張もあいまって、コミュニケーションが滞ったこともあったが、徐々に日常生活に慣れ、円滑に積極的にコミュニケーションを図るようになっていった。滞在中は事業拠点校においてほぼすべての授業に参加した。また、管理機関は国際交流サロンにおいて交流の機会を設け、北海学園大学教授による日本語教室も開いてくれた。さらに、北海道神宮、大倉山、ISHIYA CHOCOLATE FACTORY を見学し、日本文化の吸収に努め、ホストファミリーの久保さんのご家庭も施設見学やキャンプを経験させるなど、多くの貴重な機会を与えてくださった。



3. おわりに

事業拠点校にとって数年ぶりで、2回目となる中期留学生受入も大きな支障なく終わることができた。事業拠点校生徒にとっても、NATHAN にとっても、この機会を通じて両国の交流の大切さを実感し、今後ますますの相互理解が必要だと実感することができたようである。今後も重要な国際交流事業として継続したい。



Science in English: A Pathway to Solving Global Challenges

Mark Holloway



As the head of the WWL (Worldwide Learning) Consortium Support Project, I am honored to share the outcomes of the *Science in English* ～英語を用いた科学ワークショップ～, held on May 18th at Hokkaido University's Graduate School of Environmental Science. This workshop exemplified the power of combining science, English learning, and a passion for addressing global issues, such as reducing CO2 emissions and managing Japan's declining population.

At the heart of this initiative was Professor Yamanaka Yasuhiro, a globally renowned environmental scientist and passionate science communicator. With decades of experience in climate modeling and ocean sciences, Professor Yamanaka has not only contributed significantly to our understanding of environmental systems but also devoted himself to inspiring and educating young Japanese students. His commitment to nurturing future leaders reflects his belief that education is a cornerstone for building a sustainable world.

Empowering Students Through Science

The workshop began with a hands-on experiment: calculating how long it would take for a ball to fall from the JR Tower. Students worked collaboratively to collect data, calculate air resistance, and predict outcomes using spreadsheets. Guided by Professor Yamanaka and supported by assistant instructors, participants gained confidence in applying scientific methods while practicing English—an essential skill for engaging in global scientific communities.

Addressing Global Challenges

The afternoon session focused on two pressing global issues:

Reducing CO2 Emissions: Drawing from his expertise,

Professor Yamanaka guided students in exploring the science of climate change. They discussed actionable solutions, such as renewable energy adoption, carbon capture, and changes in daily habits like reducing waste. By presenting complex scientific concepts in accessible ways, he showed students how individual and

collective actions can make a significant difference.

Population Decline: Students analyzed Japan' s demographic challenges,



brainstorming solutions like family-support policies, work-life balance reforms, and immigration. They also considered how technological innovation, such as automation, could mitigate labor shortages. Professor Yamanaka emphasized the need for interdisciplinary approaches to tackle these multifaceted issues.

Inspiring the Next Generation

One of the most impactful aspects of the workshop was Professor Yamanaka' s role as a mentor and communicator. Sharing his own journey—overcoming challenges in English and becoming a respected international scientist—he encouraged students to embrace challenges and see them as opportunities for growth. His dedication to educating young Japanese is evident in his ongoing efforts to connect scientific research with community engagement and lifelong learning.

Why Events Like This Matter

Workshops like *Science in English* embody the mission of the WWL project: to cultivate globally minded students equipped to tackle real-world challenges. By integrating science with English, these events not only prepare students for international collaboration but also inspire them to take an active role in solving global issues, including those outlined in the Sustainable Development Goals (SDGs).

A Vision for the Future

As the head of this project, I am deeply inspired by the enthusiasm and determination shown by the students during this workshop. Their engagement reaffirms my belief in the transformative power of education. Through hands-on experiences and mentorship from dedicated professionals like Professor Yamanaka, we are nurturing a generation of leaders ready to create a better, more sustainable future.

My heartfelt thanks go to Professor Yamanaka, whose expertise and unwavering commitment made this event possible, and to the assistant instructors and affiliated schools for their invaluable support. Together, we are building a brighter tomorrow.

台湾嘉義市 コンコーディア ミドルスクール 生徒訪問団受入事業

小林 真史

1. はじめに

令和6年5月20日（月）、事業連携校である台湾嘉義市のコンコーディアミドルスクールから生徒34名が本校を訪問し、終日、事業拠点校において交流を深めた。

同校の本校訪問は2度目となる。



2. 報告

事業拠点校において実施した交流事業の概要は次のとおりである。

午前 ①ウエルカム セレモニー

②日本語クラス

③クッキングクラス

桜茶&桜餅づくり

午後 ①日本文化研修

あ) 茶道クラス

い) 折り紙クラス

う) 少林寺拳法クラス

②フェアウエル セレモニー



新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、事業拠点校の国際交流事業もこれまですべて中止としていたが、今年度はすべての国際交流事業を実施することとしており、当事業も予定通り実施することができた。

事業実施前には、34名の生徒が来日するとあって、事業拠点校からバディを20名募集したが、すぐに応募が募集人員に達した。また、各プログラムの担当教諭がバディを指導しながら、事前準備を入念に行ったため、当日の受入業務もほぼ抜かりなく展開することができた。

当事業の内容について少しふれたい。

まず午前のプログラムについて報告したい。歓迎セレモニーでは、事業拠点校3年グローバルコースの杉本によるイングリッシュスピーチがあった。このあと、事業拠点校の英語科教諭による日本語クラスが2グループに分かれて実施された。挨拶表現、早口言葉あそびを展開し、生徒にも好評であった。このあとは、家庭科教室に移動し、コンコーディア生徒とバディで構成される8つグループが家庭科教諭の指導のもと、桜

茶と桜餅をつくることで日本の食文化にふれた。生徒はもちろんであるが、コンコーディアミドルスクール校長の笑顔が非常に印象的であり、楽しんでいたようで安堵した。

午後は、日本文化研修として、茶道、折り紙、少林寺拳法の3つの体験プログラムを行った。

茶道部顧問教諭と茶道部員による茶道の体験、国際教育連携部の教諭による折り紙づくり、少林寺拳法部顧問教諭による少林寺拳法体験である。いずれの体験プログラムにおいても両校の生徒が積極的に交流し、笑顔あふれる交流となった。

ひととおり予定していたプログラムが滞りなく終了し、最後にフェアウエルセレモニーにて事業拠点校グローバルコース2年の久保が挨拶し、修了証を渡して当事業を終えた。

3. 最後に

国際交流をベースとする国際理解教育は比較的アレンジが容易であり、高くはないハードルのもとで学びを進めることができるため、有効であり、近い将来の海外志向や、進路観の視野を広げるのに適した活動である。

今後も国際交流の機会を充実させ、イノベティブなグローバル人材となるための素養を獲得してもらうべく教育実践に邁進したい。



台湾語学文化研修事業

小林 真史

1. はじめに

台湾語学文化研修は令和6年7月25日（木）から7月30日（火）の6日間台北・台中地域において実施し、事業拠点校にとって6度目の研修となる。生徒は8名が参加し、マークホロウエイ教諭と小林が引率した。

台湾の食文化にふれたり、SDGsを最先端農業や園芸、ダム開発にみられる日台の歴史、事業連携校である嘉義市のコンコーディアミドルスクール訪問と有意義な研修となった。



2. 報告

(1) 7月25日（木）

台湾地域に台風があり、航空機が110分の遅延で到着。緊張の表情で入国手続きをし、バスにて宿泊先へ直行。手配していた夕食はキャンセルし両教諭が生徒の夕食を購入して1日目を終える。



(2) 7月26日（金）

朝、九份を訪問し、全員での散策と各グループでの散策を行う。雨天のため、急傾斜地のため、階段での滑り事故のないよう慎重に行動することを心がけた。

九份で昼食を終え、研修後は、台北市に戻り、歴史を学ぶ目的で忠烈祠と龍山寺を見学。

忠烈祠では、衛兵の交代式も見学でき、生徒も感動した様子。龍山寺では、台湾の人の厚い信仰心を垣間見ることができた。

夕方、高速鉄道を利用して、嘉義市に移動し、手配先で夕食をとり、ホテルへ移動し、2日目を終える。



(3) 7月27日(土)

朝に、コンコーディアミドルスクールのブルース教諭とスタッフの方々とホテルで面会、打ち合わせを行い、学校へ移動。午前中は台湾語と英語による台湾文化に関する授業。コンコーディアの生徒が、笑顔で積極的に交流を図ってくれて、本校生徒も次第に緊張から解放され、仲良くコミュニケーションを深めていった。

午後は、SDGsに向けた取り組みを、農業、園芸、ダム開発にみられる日台の歴史の面から学ぶフィールドに出かける。

農業については畑も土もなく、設備投資豊かな屋内施設において野菜栽培に取り組む先端農業を見学。収穫したばかりのミニ野菜ビュッフェに一堂感激していた。

この後、胡蝶蘭の生産・出荷に携わる方を訪問（コンコーディアミドルスクール保護者会長の農園）し、胡蝶蘭の生産場を見学し、フラワーバスケット作りを行った。この膨大な数の胡蝶蘭、ほぼ日本へ輸出していることを聞き、やはり日台の結びつきを身近に実感することができた。

フィールドワークの最後の研修地は、台中のダムを見学。日本の技術が用いられているようで、台湾と日本の歴史を学ぶことができた。このダムは、市民の憩いの場となっているようで、ピクニックを楽しむ人、凧あげをする人、太極拳を楽しむ人がたくさんいた。また、日本語で声をかけてくれる年輩の人もあり、とても清々しく幸福な気分になった。

語学あり、フィールドワークあり、現地の方とのコミュニケーションありの非常に充実した1日であった。夕方、嘉義市のホテルに戻り、全員でホテル近くの台湾料理店で夕食をいただき、その後、スーパーに入り、現地ならではの食品や雑貨を購入してからホテルへ戻った。

体調を崩す生徒もおらず、全員が充実感あふれた表情で研修を終了した。



(4) 7月28日(日)

午前中は昨日同様に、台湾語と英語による語学の授業。両校の生徒が相互に積極的にコミュニケーションを図る様子がみられ、台湾語に対する関心もいっそう高まった。

授業の後は、台湾で最も有名なパイナップルケーキのメーカーを訪問。社長の母は千葉県出身の方で、ここでも感激の出会いがあった。パイナップルの収穫体験、お菓子の製造過程を学び、施設を見学し、学校へ戻る。

学校に戻って、全員、クッキングクラスに参加し、パイナップルケーキをはじめとするスイーツづくりを楽しむ。

持ち帰ることが容易になるようにとギフトボックスを用意して、生徒に持たせてくれたことにも現地の方の細やかな心を感じ、ここでも皆、感激していた。

夕方、ホストファミリーを対面し、生徒がそれぞれ家庭へと移動し、研修4日目を終えた。



(5) 7月29日(月)

生徒は朝、ホストファミリー宅からコンコーディアハイスクールに登校。

いずれの生徒もかなりのおもてなしを受けたようで、現地の家庭での生活にふれ、感激した様子。

修了式とフェアウェルセレモニーが行われた。本校生徒は英語で感謝の気持ちを述べ、校長から一人ひとりに修了証が授与された。

生徒はそれぞれ、再会を誓いながら笑顔と涙とともにお別れをした。



コンコーディアミドルスクールを出発し、バスで静宜大学へ向かう。同大学訪問を研修地に組み込んだのは、近年の台湾への進学生徒の増加に伴うことによるものである。

静宜大学は桂田教授のお話によると台湾の初等中等教育における英語教育をサポートしていること、世界からの留学生の受入と英語教育の充実に熱心に取り組んでいるとのことである。



今回は本校卒業生の住友とも面会を果たし、また熊本県の SGH 採択の高校を卒業した留学生と面会することができた。本校の生徒たちも学部長と桂田教授のお話を耳にし、動画や画像、学生寮を見て、関心を高めたようである。帰国後に、静宜大学への進学を目指す生徒もいたことで、とても有意義な機会となった。

大学見学後は、台中市内を散策し、高速鉄道で台北市に戻り、士林夜市を見学。夜市では店の数と人の多さに圧倒され、コンビニエンスストアで夕食を購入しようとしていた生徒グループがあり、引率者が声をかけ、現地の食堂で食べることが学びとなることを伝えるも、いくつかの理由があって入店をためらっていたとのこと。そこで、引率者が一緒に入店し、注文し、引率者が店を出て遠巻きに見守るという状況にしたのだが、生徒たちはとても満足したようで、これも学びであり、彼らの学びを少しはサポートすることができたのではないかと、こうした少しの配慮が、生徒の学びの深化の契機となるのではないかとあらためて自分自身を見つめることにもつながった。

こうして研修5日目を終えた。明日は早朝便での帰国となるため、早い就寝を心がけるよう伝えて宿泊先に戻った。

(6) 7月30日(火)

早朝、桃園空港を離陸し、新千歳空港へ戻る。体調を崩す参加生徒もおらず、出迎えてくれた家族にふれ、皆、安堵の様子であった。引率教諭が挨拶をし、生徒リーダーの菅原がスピーチし、解団となった。



3. おわりに

本校にとって6度目となる台湾語学文化研修を無事に終えた。回を重ねることに両校のプログラム運営もより円滑になってきた。生徒は今回の経験を糧として、グローバル社会を担う次代のリーダーとなることを心から期待して当研修引率報告とする。

北海道平取高等学校 PRESENTS 探究！ アイヌの生活・文化

小林 真史

1. はじめに

令和6年8月23日（金）に、事業連携校である北海道平取高等学校が主管となって「探究！ アイヌの生活・文化」が実施され、事業拠点校生徒26名が参加した。今年度は新たに、全国から応募してきた大学生が平取町に5日間滞在し、平取町の振興を考える「大地連携ワークショップ」の見学をプログラムに組み込み、同ワークショップの見学、二風谷アイヌ文化博物館見学、平取ダム見学、関根健司先生の講義、平取高校生徒とのワークショップならびに学習成果発表と、充実した1日となった。

2. 報告

夏休み明け間もない令和6年8月23日（金）事業拠点校生徒26名が平取町において実施される探究活動に参加した。

まず、平取町イオル文化センターで行われている「大地連携ワークショップ」に参加し、全国から集まった大学生によるアイヌ文化振興、地域振興を考えるプレゼンテーションを見学した。昨年、このワークショップに参加した経験をもつ北海道大学大学院生の河合さんも同行し高校生に要所要所で助言をいただいた。

4組のプレゼンテーションを見学後、隣接する二風谷アイヌ文化博物館を見学した。同博物館の所蔵品は非常に充実しており、アイヌの生活や文化のダイナミクスと豊かな芸術性を体感することができる。衣装や生活用具、ユカラの記録映像を目にした生徒達は、興味関心を一層高めていた。

博物館見学後は、隣接する沙流川歴史館を見学し、沙流川流域の歴史や自然、動植物に関する展示を見学した。自然豊かな地でアイヌの生活が守られてきていることを実感しつつ、次のプログラムに期待を膨らませた。この後、バスで移動し、北海道平取高等学校へ移動する途中、平取ダムに立ち寄った。雨と風が強く、短時間となってしまったが、平取ダムを見学することができた。



午後は、北海道平取高等学校を訪問した。
学校長先生、教頭先生にご挨拶の後、会場の体育館へ移動する。

初めにアイヌ文化に関する講義を聞く。昨年同様に、平取町教育委員会の関根健司氏による講義である。関根氏は兵庫県のご出身であるがアイヌ語への関心とともに研究を深め、今では日本有数のアイヌ研究者でおられ、マスメディア出演も多く、学校でのアイヌ講義も数多く行っている。

関根氏は、アイヌ語・アイヌ文化振興への熱い思いを訴え、また、参加した両校の生徒には今回見聞きしたことを自分の心にとどめるだけでなく、周囲の人々に伝えていくことが大切であるとお話された。

講義後は、1時間のワークショップを行った。6つのグループに分かれ、午前行われた大地連携ワークショップと二風谷アイヌ文化博物館をはじめとする施設見学についてのこと、そして関根健司氏の講義を聞いて考えたことを話し合い、話し合いと同時にイメージマップ作りに取り組んだ。

両校生徒はお互いに初対面でありながら、積極的に言葉を交わし、アイヌ文化の振興について意見交換した。そして、最後には各グループがイメージマップを持ちながら、話し合ったことを発表し、全員で学習内容を共有した。

アイヌ振興策として考えられることとして、生徒から多くの意見が発表された。具体的には、SNS を用いて見たことをどんどん発信することや、民芸品を札幌や東京で大々的に展示・販売すること、学校で今回学んだことをプレゼンすることといった意見があった。

3. おわりに

盛りだくさんであったが、両校生徒が非常に充実した1日を過ごした。各校の教育目標や特色ある教育活動の一端にふれ、興味関心がより高まったようであった。今年度がWWLコンソーシアム構築支援事業完成となり、来年度からは事業の自走を、より丁寧に進めたい。



最後に、当事業に参加した生徒のレポートを掲載して事業報告を終えたい。

今回、私は、アイヌの文化についてもっと興味を持つきっかけになりました。今回特に興味を持つきっかけとなったのは、大地連携ワークショップの拝聴です。そこでは色々な地域からきた大学生が平取町の二風谷アイヌ文化をどうやって広めていけば良いかをグループでまとめ、具体的な事業を発表していました。その中で自分が良いと思った案は平取町をバーチャル世界として VR で探検をすることが出来たりアイヌの工芸家に話しかけるとアイヌの工芸品の作り方などが聞けるという案です。自分はこの案を聞いて思ったことは、現代の若者が興味を持つきっかけになり若い世代の理解者を増やすことによって、新たな日本文化とアイヌ文化が合わさりアイヌ文化が広がるきっかけになると考えました。また、自分だったらどのような事業を出すのかを考えていると、もっとアイヌ文化を知りたいという興味が沸いてきました。関わってくださった方々ありがとうございました。 【3年 本間 健太郎】

私は、昨年度の WWL の活動に参加し、白老町に行きウポポイなどのアイヌの生活や文化を知れる様々なところを見学しアイヌ料理もいただきました。そこで、アイヌのことを知ることができ、もっと知りたいと思い今回の活動に参加しました。

今回は、平取町に行きました。平取町では、まず、イオル文化交流センターに行き大学生が発表している大地連携ワークショップを拝聴しました。アイヌ文化を広めるために様々な方法を考えて発表していてとても勉強になりました。次に、二風谷アイヌ文化博物館を見学しました。実際に使われていたものが数多く展示されており、どれも保存状態がよくアイヌの人々のものを大事に扱うという心が伝わりました。そして、狩りの仕方や罠のかけ方などを体験できるスペースもあって興味深かったです。お昼後には、平取高校にお邪魔させていただき、平取高校の生徒さん達とともに講話を聴きグループワークをしました。たくさんのアイヌ文化を広める活動のアイディアを出し合いそれを発表し実現できたら面白いだろうなと思いました。

平取町での様々な活動を通してまた、さらにアイヌのことを知る機会ができた貴重な体験でした。 【3年 森下 真衣】

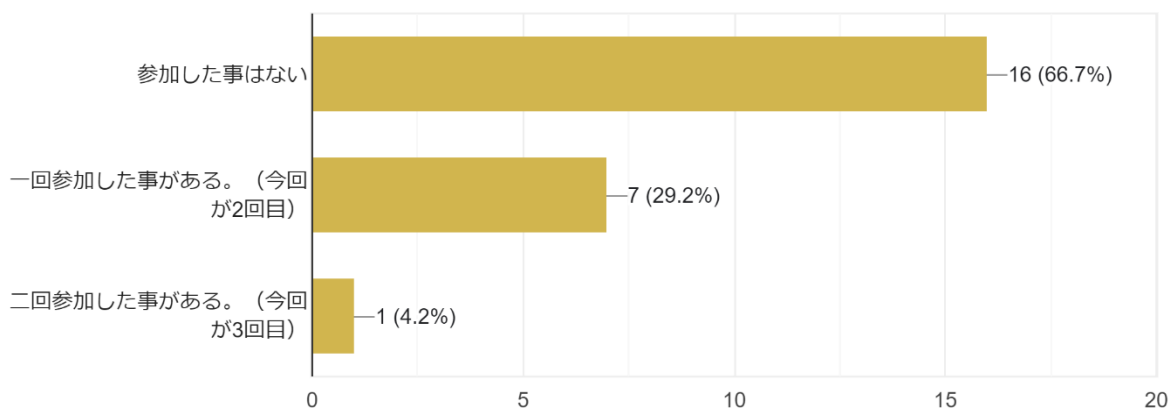
私が今回の WWL 事業で一番楽しみにしていたのは二風谷アイヌ文化博物館見学です。中に入ってみると展示物の多さにびっくりしました。アイヌの衣服が展示されていました。樹皮でつくられたものや、魚の皮からつくられたものもありました。色だったり、質感だったりと実際に見てみないとわからないものがありました。午後は平取高校に行き、両校生徒でアイヌ文化を広める活動について意見を出し合いました。私の班は、SNS の活用や、映画製作、アイヌ料理のレトルト食品の開発など様々な意見がでました。自分では思いつかないような意見を聞くことができて面白かったです。今回の参加を通して、アイヌ文化の振興について考えるきっかけになりました。大学へ進学したら、地域おこしについて学びたいです。 【3年 前川 結】

WWL 平取高校『探究！アイヌの生活・文化』参加者事前アンケート集計

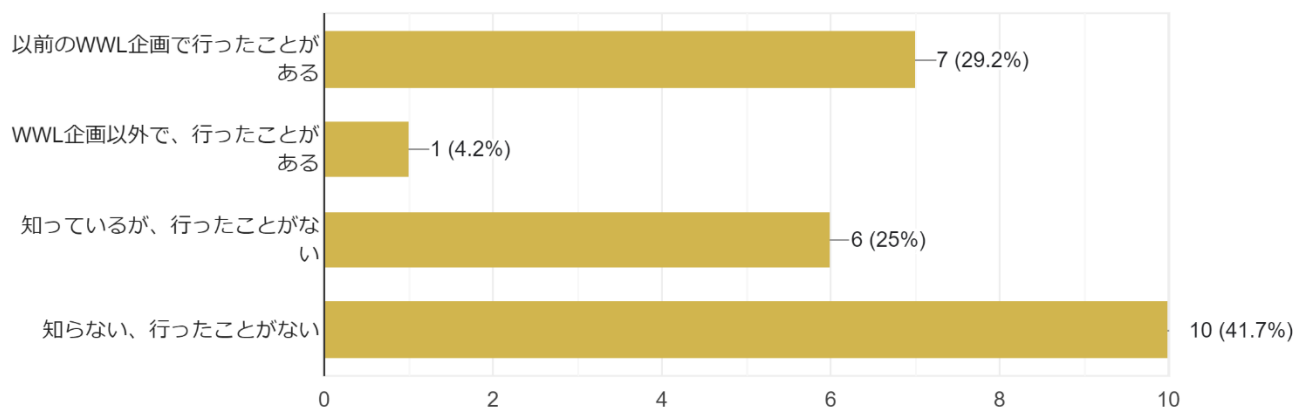
① 今回参加する目的を教えてください。

- ・アイヌの歴史や文化をもっと知りたいと思ったから。
- ・アイヌ文化に興味があるから。(多数意見)
- ・アイヌ文化博物館を見学できると聞いたから。
- ・自分の知識を深めるため。コミュニケーションをとり、今後の経験にするため。
- ・アイヌの文化について深めたいと思ったのと、中国の人と交流したいと思ったからです。
また違う学校の人とも交流し、人との関わりを勉強したいからです。
- ・去年も WWL に参加しました。その時に多くのことを学べたのでまた参加したいと思いました。
- ・前回参加して面白かったしアイヌの事をよく学べたから。
- ・博物館の見学。
- ・アイヌの文化を知りつつ、なかなか関われない他校との交流の機会にもなるため参加したいと思いました。
- ・進路の役に立てばいいと思ったから。
- ・他校の方たちと交流するのが楽しそうだったから。
- ・先住民族について興味があったことと、学校外の人と関わる機会はそれほど多くないため多くの経験を得られると感じたから。

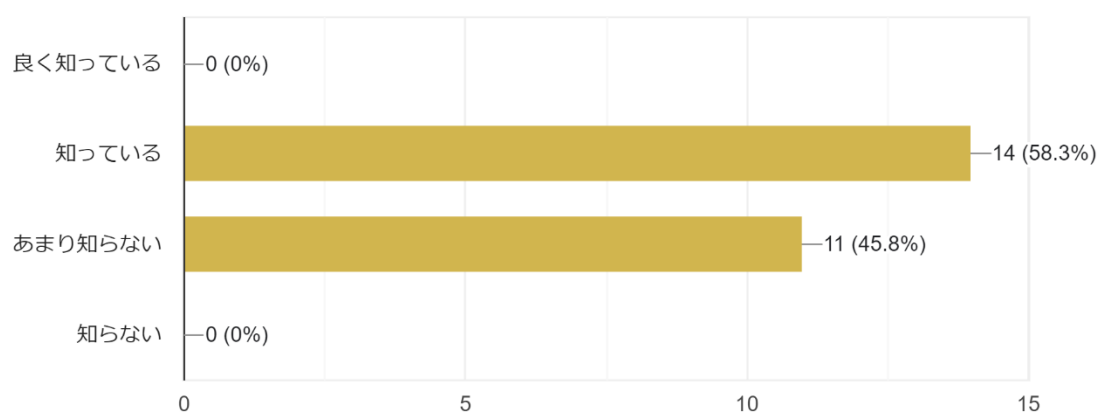
②「探究！アイヌの生活・文化」の平取高でのイベントに過去に参加した事がある。



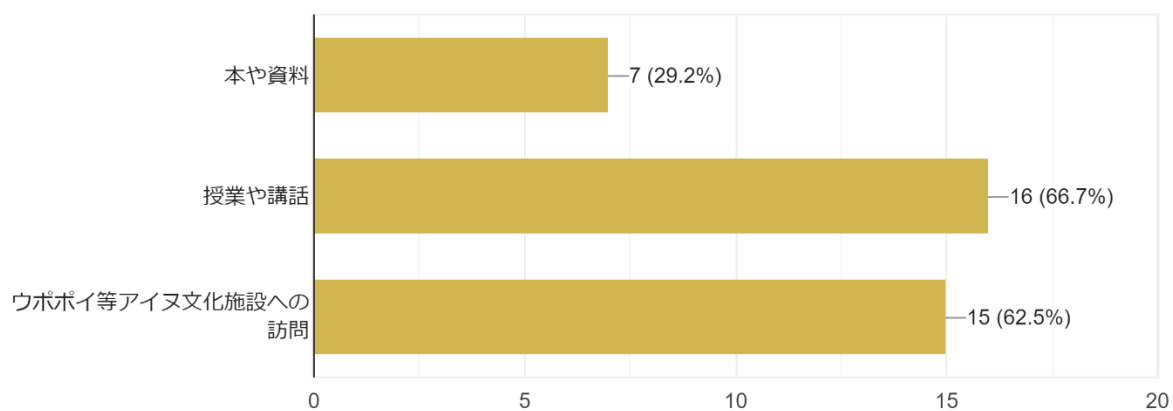
③『二風谷アイヌ文化博物館』を知っている、また行ったことがある。



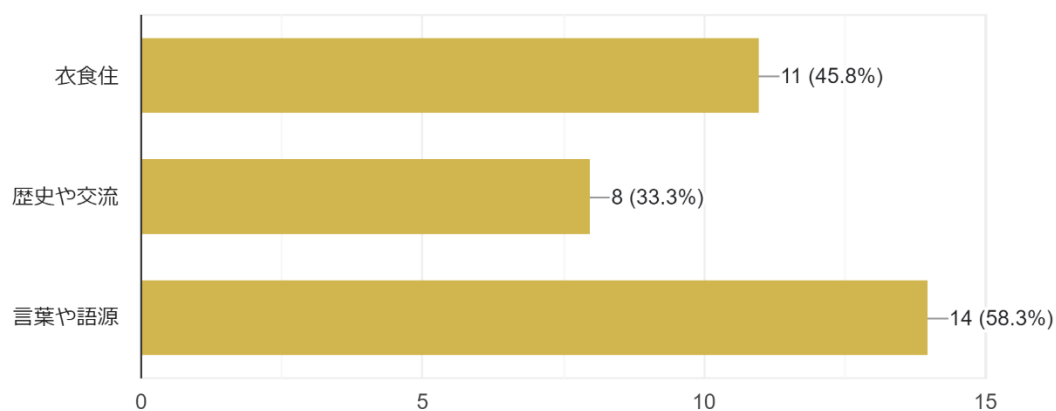
④アイヌ文化や生活について知識がある。



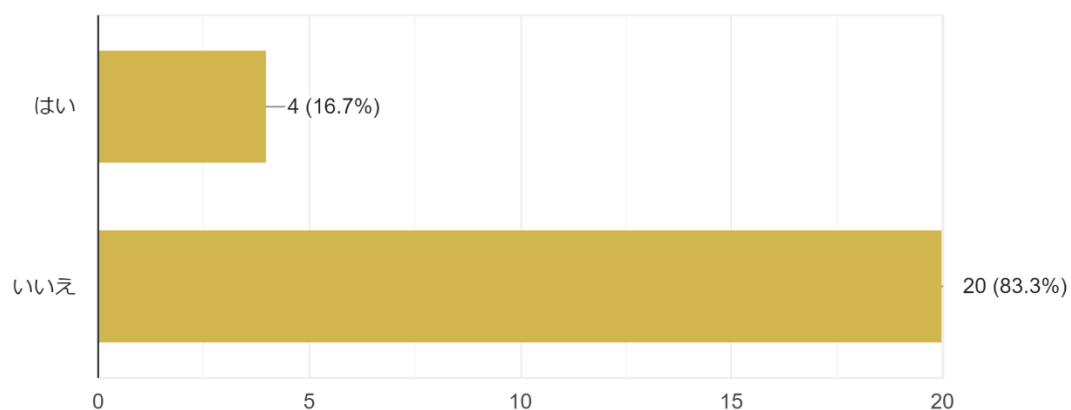
⑤アイヌ文化の情報源は何ですか。



⑥アイヌ文化で興味がある事はどれですか。



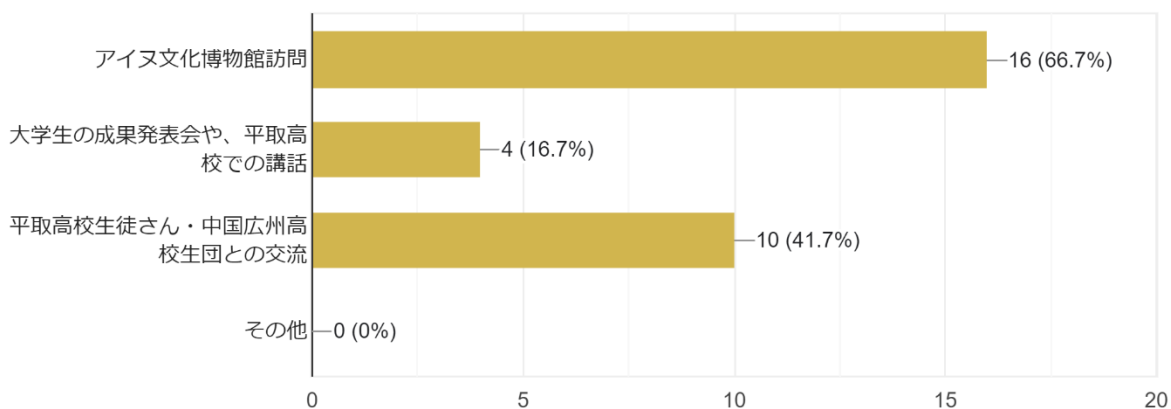
⑦参加するにあたり、質問・調査事項等を事前に準備している、準備する予定である。



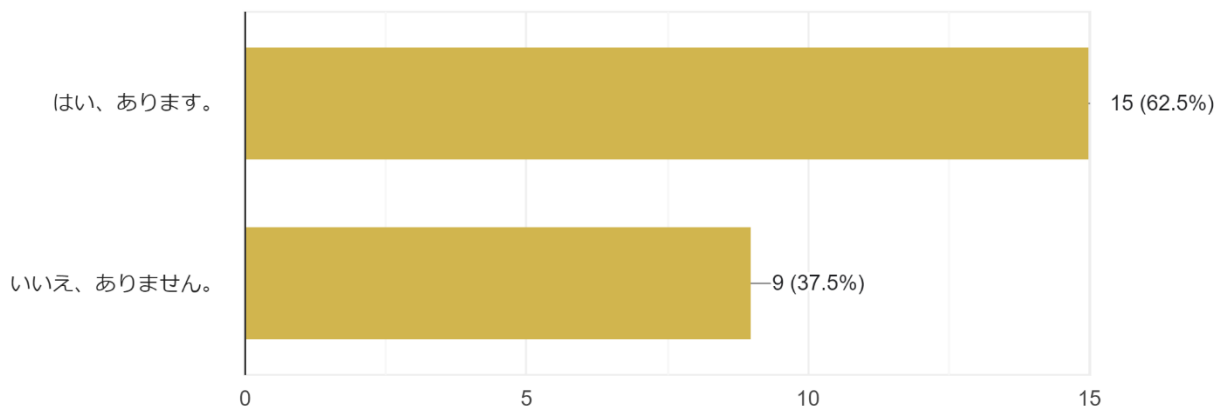
⑧上の質問で『はい』を選択した方は、その内容を簡単に教えてください。

- ・アイヌ民族の暮らし。
- ・どのような目的で文化体験や交流を行っているのか。
また、社会にどのような影響を与えたいのかが知りたい。
- ・1年と2年と体験しているので感じ方が違うと思うから前回と違ったように感じたことを忘れないようにしたい。

⑨今回、楽しみにしている事はなんですか。



⑩今までに WWL の企画に参加したことがある。



⑪上記で「はい」と答えた方に質問です。どんな企画に参加しましたか？

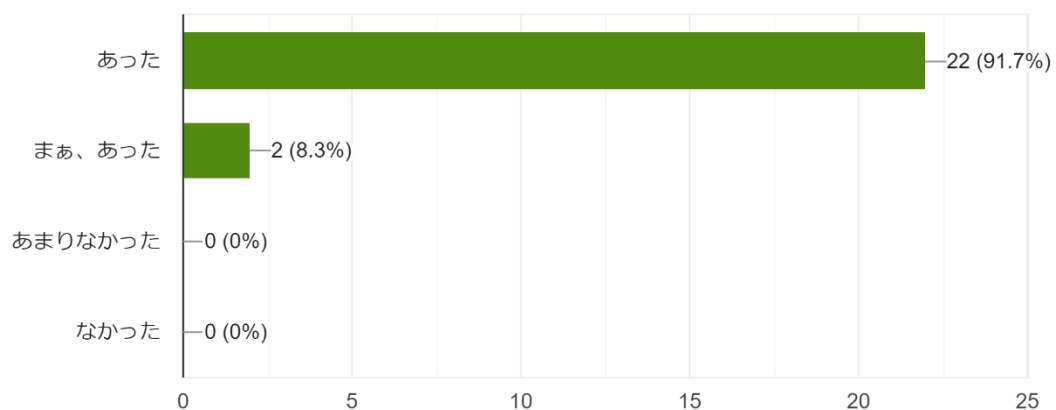
- ・グローバルサマーキャンプ
- ・白老のウポポイ見学（5名）
- ・札幌保健医療大学でのSDGsへの取り組み（2名）
- ・平取（2名）
- ・学園大の講演会など
- ・畑作業（3名）
- ・グローバルビレッジ
- ・アイヌ企画

WWL 平取高校『探究！アイヌの生活・文化』参加者事後アンケート集計

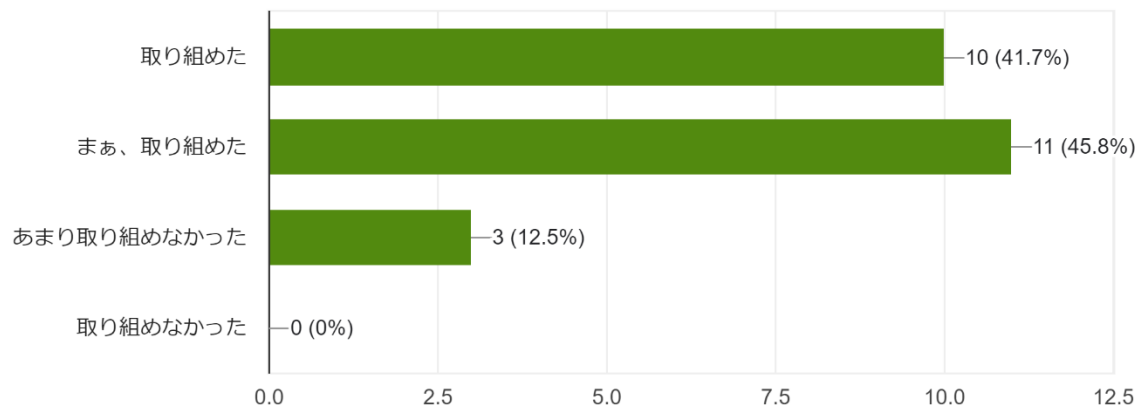
① 今回参加した理由は何ですか。

- アイヌに興味があったから（多数意見）
- 友達からの誘い
- アイヌの文化を知りたかったから（多数意見）
- コミュニケーションの場にしかたかったから
- 平取高校の方たちと関わる機会があると聞いて楽しそうだったから
- アイヌ民族についての知識を深めるため
- 博物館に行ってアイヌ文化を学べると聞いたから
- 1年生の時に参加して面白かったし、アイヌの事について学べたから
- 去年も同じアイヌの WWL に参加し、知らないことを沢山知れたから
- 去年の WWL が楽しかったから
- アイヌについて知りたいと思った事と、人との関わり方を学ぶため
- 親がアイヌの文化が好きで、小さい頃から何度もウポポイに訪れている事もあり
今でもアイヌに興味があったから
- 先住民族について興味があったことと、学校外の人と関わる機会はそれほど多くないため
多くの経験を得られると感じたから
- 色々な人と関わりたいから

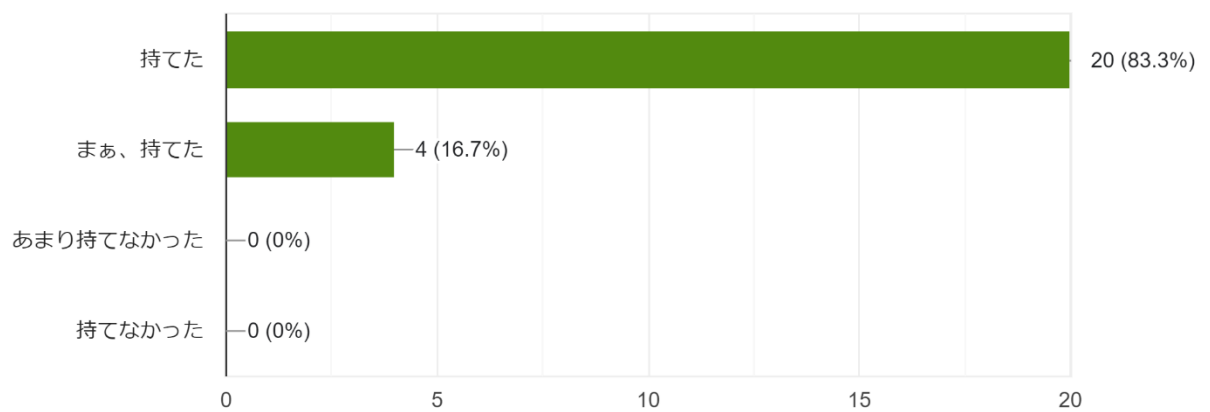
② 今回の参加は、自分にとって意義のあるものだった。



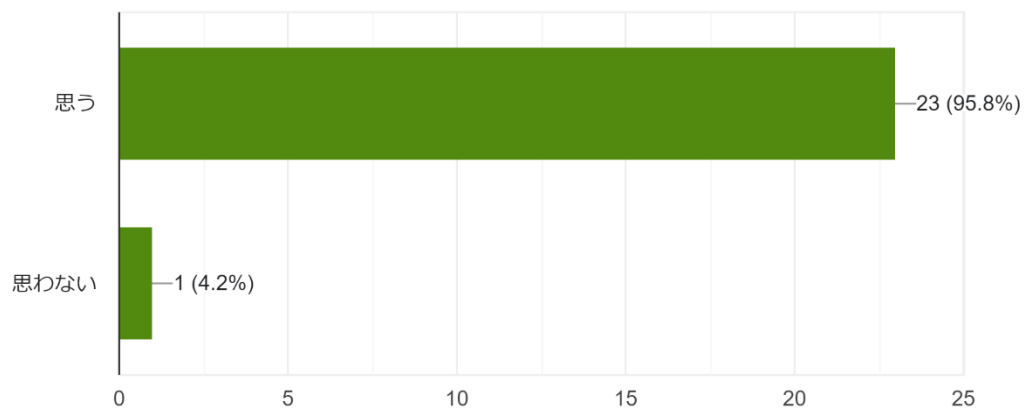
③ 自分で課題を発見・設定し、情報収集・課題解決に取り組めたか。



④ アイヌ文化や伝統にふれ、新しい発見・興味・関心が持てた。



⑤ アイヌ文化や伝統等、学んだことを広めたいと思う。



⑥ 上の質問で『思う』と答えた方は、その広める方法・手段を、『思わない』と答えた方はその理由を教えてください。

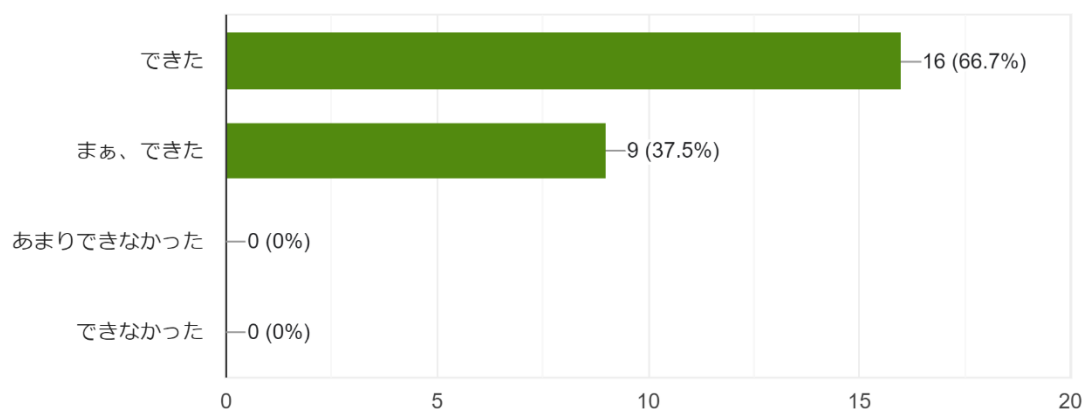
【思う】

- SNS（意見多数）
- 歴史を途絶えさせたくないから
- 友達に話す、SNS で発信する
- tiktok
- SNS を活用して特に若年層に広めたい
- 行っていない友達に話したり、親に話したりして身近な人から広めていきたい
- ポスター作り
- 今回学んだことを家族に報告して、興味を持ってもらう
- 歴史ある文化を途絶えてはいけないと思うから
- 面白い文化が多いから
- 大通りや札幌駅などの街中で個展を開いたり、工芸などの体験学習などを開いたりしてアイヌの博物館がないところでも、アイヌのことに触れられる機会を増やす方法
- まずは身近な人から、今回のような体験を伝えることで興味を持ってもらうという方法

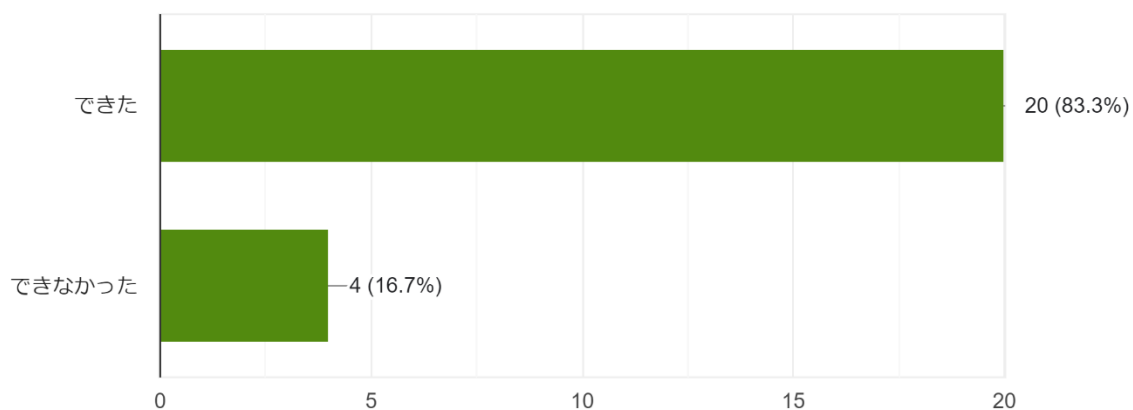
【思わない】

- できることがかなり限られていると思ったから

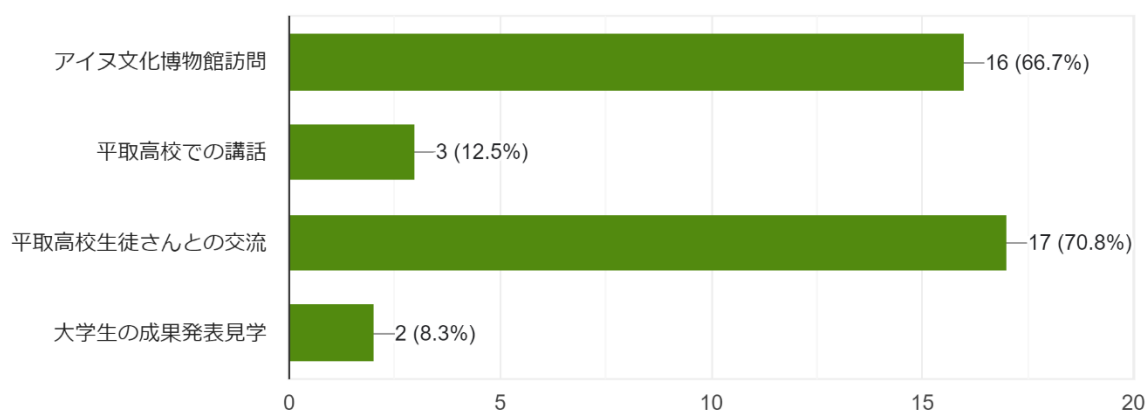
⑦ 積極的にグループ活動に参加し、意見交換ができたか。



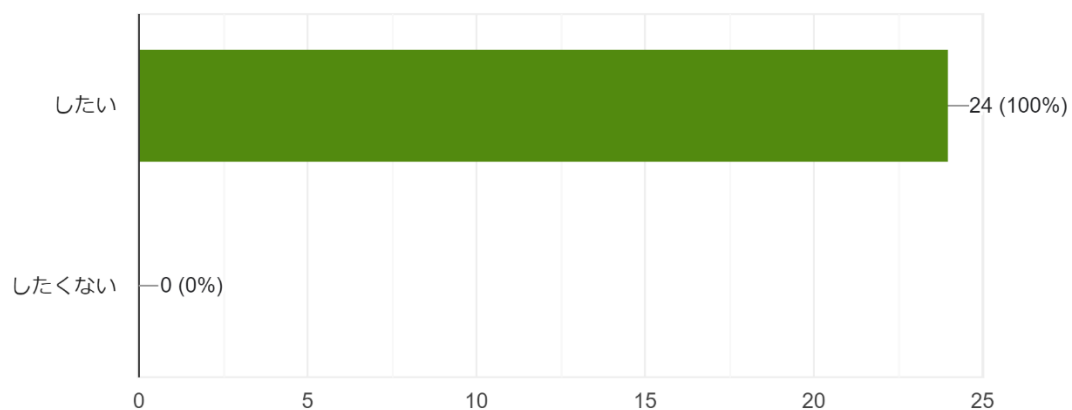
⑧ 持続可能な開発目標（SDGs）を意識して、活動に参加できたか。



⑨ 今回、楽しかった事は何ですか。



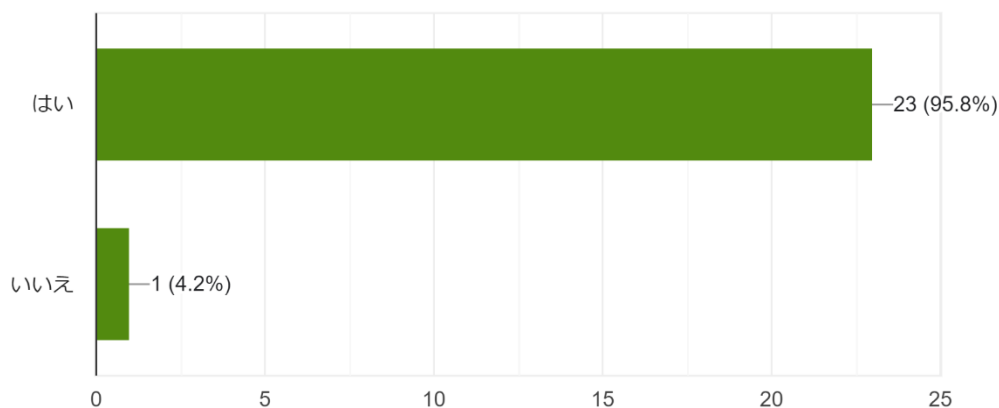
⑩ 今後も他の学校との交流に参加したいですか。



⑪ 今回の参加で、一番印象に残っているものを教えてください。

- ・アイヌ文化博物館（多数意見）
- ・平取の高校生との交流会（多数意見）
- ・先輩方との交流
- ・グループ交流。仲良くなれました。
- ・アイヌ語を広めている方の講話とアイヌ資料館
- ・博物館の訪問。畏をしかける展示物体験が難しくて、アイヌの人はすごいなと思った。
- ・アイヌ文化博物館でアイヌの歴史や言葉について学んだり、体験できたりしたこと。
- ・二風谷博物館で実際にアイヌのものを見られたこと。
- ・平取高校の人たちと楽しくアイヌ文化について話せたこと。
- ・博物館に展示されていたアイヌ民族の罨
- ・アイヌ文化博物館で、アイヌの人が使っていたものや歴史を沢山見られたことと、他学級や他学年の人と関わることが出来たこと。
- ・大学生の発表が「ああ、なるほど！」と思えるような面白い案ばかりで、聞いていても飽きずにとてもわくわくしたので特に印象に残っています。
- ・平取高校での、学園札幌の三つの学年と平取高校の一年生で班を組みアイヌの文化について考える事がとても楽しかったです。

⑫ 今後も WWL の活動に参加したいですか。



⑬ WWL で企画してほしいイベントはありますか。あれば教えてください

- ・他校との交流
- ・留学生との交流
- ・海外の人と交流する機会をつくり、文化などを共有し海外の人と関わる活動
- ・お仕事体験など自分の将来の夢がはっきり見つけられそうなもの
- ・次は南区にあるアイヌ文化交流センターへ見学に行きたいです！

『フードロス削減 How to Use up! 2024』事業報告

教諭 三浦 琢斗

1. はじめに

1. 目的

食品ロスの観点から SDGs GOAL2 『飢餓をゼロに』の目標達成のためのプロセスを日常生活に応用していくことの重要性を培うことを目的とする。

2. 日時

令和6年8月22日（木） 9：00—15：00頃まで（終日公欠）

3. 場所

札幌保健医療大学 ※本校出発 バス移動

4. 概要

収穫体験

食材の素材についての講演

日頃廃棄される可能性が高い部分の活用体験

5. 事業支援者

札幌保健医療大学 荒川義人 教授

札幌保健医療大学 百々瀬いづみ 教授

札幌保健医療大学 保健医療学部栄養学科 学生

2. 報告

①荒川義人教授による講義『北海道産農産物の特性を知ろう！』

北海道の農畜産物の地域特性は気候の違いによって様々な種類があり、道産の農畜産物は全国区の銘菓や加工品等の原材料として支えている事を聞き、生徒たちは興味深く聴き入っていました。また道産のお米・大豆・小豆・じゃがいも等のそれぞれの成分特性をご講義いただき、その中でも札幌発祥である「札幌黄」と言われるたまねぎ、「札幌大球(たいきゅう)」と言われるキャベツの歴史を知り、現在もその歴史を受け継ぐべく農家の方々は日々研究・開発をされている事を学び、農業の苦労や大変さを感じたのではないのでしょうか。札幌保健医療大学生による野菜の講話とベジチェック体験札幌保健医療大学の学生さんが、当日の調理実習で使われる野菜の特性をお話ししてくださいました。実は普段捨てられている皮の付近に栄養が多く含まれていることや、お店で売られている野菜の鮮度の見分け方、保存方法等、身近なお話をしていただき生徒達は驚きの声をあげたりしながらも楽しそうに学んでいました。講話の後百々瀬教授から、普段自分たちがどれだけ野菜を摂取しているか…「ベジチェック」という機械で計測してみよう！と、計測体験を行いました。12段階の摂取レベルに分けられ、約一か月前の野菜摂取量がどれくらいなのか。一日に必要な野菜摂取量のレベルが 7～8 ですが、なかなか基準に達する人がおらず、自分たちがいかに野菜不足の生活をしているかを実感していました。これを機に日頃から野菜摂取を気に留めて、野菜を食べる事が増えるでしょう。

②活用体験（調理実習）

フードロスを実践。普段は捨てがちな葉や皮も使い、今回作るのは、炊き込みご飯・カブの葉とにんじんの和風スープ・カブの肉みそ炒め・たっぷりかぼちゃマフィンの4品です。サクサクと野菜を切っていく生徒、かぼちゃを見つめどこから切るのか悩んでいる生徒、慣れない手つきの包丁さばきにドキドキしながらも真剣に取り組む生徒たちの姿に、普段教室では見られない表情が見られました。2時間程で完成・実食。自分たちが作った物と、他の班が作った物と、食材の形や煮込んだ色が違ったり様々でどの班からも「美味しそうに出来た！」と声が上がっていました。実食も皆、しっかりと味わい嬉しそうに食べていました。

③グループ討議と全体討論

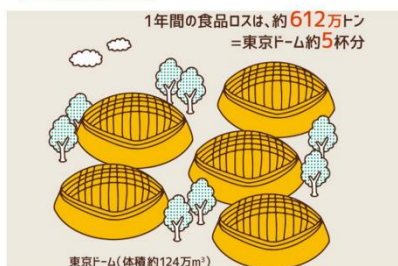
今日学んだ体験をまとめるグループ討議。生徒たちは9つの班に分かれ、感想や意見を模造紙に書くグラフィックレコーディングを行いました。それぞれ印象に残った事を話し合い、「あのアイスクリームの原料が北海道産だったなんて！」「ベジチェックで最高レベルだったのは私！」「実より皮の方が栄養があるとは知らなかった」等様々な意見を出し合い、取り組んでいました。その後、班ごとに出た意見をまとめ1分程度スピーチ・発表をしました。

④高校生会議にての報告

事後学習として、レポート作成を行いました。その中で、代表生徒3名、（吉田麻佑子、稲葉雫、輪島天音）がスライドに学習内容をまとめ、成果発表として報告をいたしました。

右図のようなスライドを活用するとともに、実際に学習日に調理実習で調理したものを試食していただく機会もありました。代表生徒だけでなく、参加生徒全員がとても貴重な機会となりました。

現在の日本の食品ロス



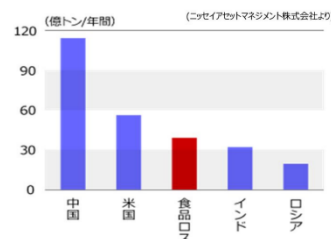
東京ドーム

5杯分

・廃棄された食品からメタンガスが発生 →地球温暖化の原因

・食品の処理
→多くのエネルギー、資源が必要

環境への負担が大きい



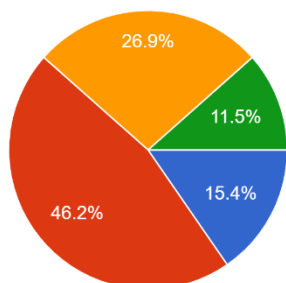
食品ロスは世界3位の温室効果ガスの排出源

⑤アンケート結果

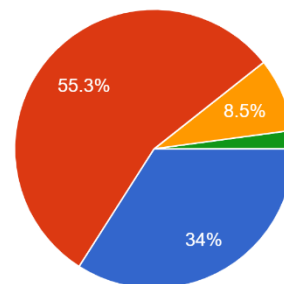
事前アンケート

事後アンケート

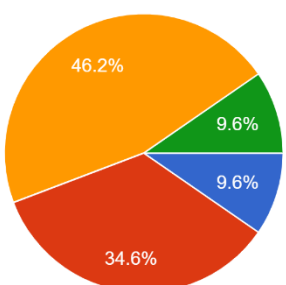
①SDGs Goal12 『飢餓をゼロに』の目的を理解している。



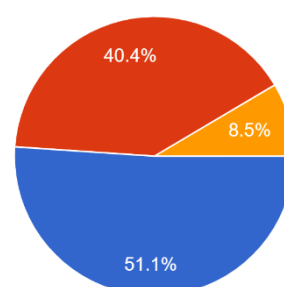
- ⑤大変そう思う。
- ④そう思う。
- ③少しはそう思う。
- ②あまりそう思わない。
- ①そう思わない。



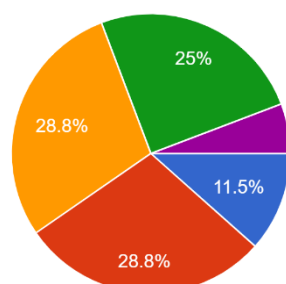
②Food Loss 削減に向けて、具体的にできることを何か知っている。



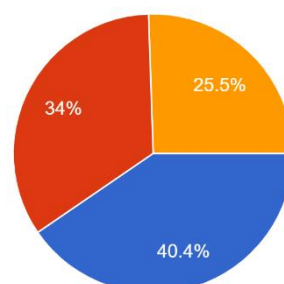
- ⑤大変そう思う。
- ④そう思う。
- ③少しはそう思う。
- ②あまりそう思わない。
- ①そう思わない。



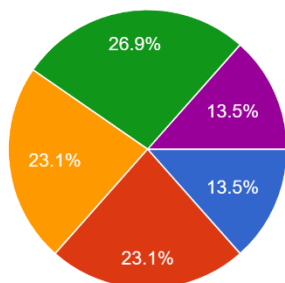
③Food Loss 削減のために今取り組んでいることがある。またしよ



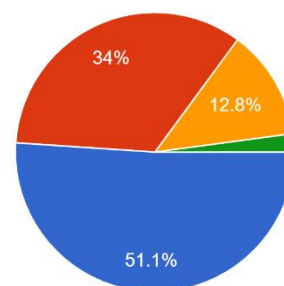
- ⑤大変そう思う。
- ④そう思う。
- ③少しはそう思う。
- ②あまりそう思わない。
- ①そう思わない。



④普段料理をした際、使えない部分を廃棄せず、活用する方法を知 (野菜で切り残した部分など)



- ⑤大変そう思う。
- ④そう思う。
- ③少しはそう思う。
- ②あまりそう思わない。
- ①そう思わない。



3. まとめ

報告、アンケート結果からもこの度の学習機会で生徒たちの意識、理解は深まることができたと感じます。何よりも、過ごしている日常では活用していない部分を実際に調理し食事をすることができたことは誰もが経験できることではありません。実際に肌で感じるとともに、講義を通して理解を深められたことで発展学習を継続していければと感じています。

最後に、今年度も貴重な機会を提供してくださいました荒川教授、百々瀬教授、札幌保健医療大学の学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

北海道白老東高等学校 PRESENTS 歴史と SDGs をつなぐ

小林 真史

1. はじめに

令和6年10月11日（金）に、事業連携校の北海道白老東高等学校が主管となり、民族共生象徴空間ウポポイと仙台藩元陣屋資料館を会場として、アイヌ文化、北方警備史をテーマとする探究活動「歴史と SDGs をつなぐ」を実施した。

白老東高等学校から50名、事業拠点校から30名が参加した。

2. 報告

北海道白老東高等学校の小林教諭と志田教諭によるアレンジのもと、当事業が実施された。午前は民族共生象徴空間ウポポイを両校生徒で編成されたグループで見学した。はじめにホールでアイヌ舞踊を見学した。近年話題の施設であることから、外国人見学客も多く、アイヌ文化への関心の高さがうかがえる。アイヌ舞踊をみていると自然への畏敬、動植物への敬意を豊かに表現されており、見学した生徒は見学したことに対する感動を口にしていた。

アイヌ舞踊見学をした後は、博物館を見学し敷地内にあるチセを見学したり、昔遊びの体験をするなどして過ごした。昨年度と異なり、グループ単位で交流しながら見学する形態を主たる活動としたため事業後アンケートでは、もっと交流する時間を設けてほしかったという意見が半数以上を占めた。ウポポイの見学を終え、事業拠点校3年生の岡田がお礼の挨拶をし、午前の両校生徒による活動が終了した。この後、事業拠点校生徒のみ白老町の仙台藩元陣屋資料館へ移動した。

仙台藩元陣屋資料館は、ロシアの南下に備えて仙台藩が幕末に北方警備にあたった歴史、仙台藩士とアイヌとの間の良好な交流を学ぶことができる施設である。北海道史を警備の面から学ぶというテーマをにつ



いて、北海道白老東高等学校の志田教諭と3名の高校生、友の会のガイドの方々がとても興味深くアレンジしてくださり、

非常に興味深い学びの場を提供してくださった。

3名の高校生は週末や夏休み期間に、同資料館でボランティアガイドを務めているということで、説明が非常に流暢であり、事業拠点校生徒もボランティアガイド生徒の説明に聞き入っていた。

資料館を見学した後は、屋外に移動し、内曲輪、外曲輪、土塁、藩士が160年前に植えた赤松を、友の会のガイドの方の説明サポートも受けながら見学した。

最後に、資料館にもどり、両校生徒間でお礼の挨拶を交わし、当事業の全行程を終えた。



3. おわりに

アイヌの文化を学び、未来にはこの文化の大切さが語られていることを想像しながら、こうした探究機会を継続していくことが、今後ますます重要になっていくであろう。

事業拠点校生徒が、事業連携校生徒と共に学び、相互に意欲的に取り組んでいる姿にふれることで、よりいっそう自己の興味関心を喚起し、探究意欲を喚起する。北海道から歴史とSDGsをつなぎ逞しく発信していくことを期待してやまない。
最後に、当事業に参加した生徒の声を掲載する。

今回WWLでウポポイと仙台藩元陣屋に行ってみて、アイヌ民族の暮らしや文化について学べることができました。アイヌ民族だけでなく、仙台藩の北海道での生活や環境の変化で亡くなられた方なども今回また知ることが出来ました。

ウポポイでは、最初に見たアイヌ民族の踊りを見ることが出来て、とても良い体験となりました。他にもアイヌ民族のチセや刀なども見る事ができたりしました。他にもチセの前でアイヌ民族の遊びがありやる事が出来、そこでは民族衣装の体験もすることができたので良い経験になりました。

仙台藩元陣屋では、白老東高校の方がわかりやすい説明をしてくださったため、ただ展示を見るよりも理解することができました。仙台藩元陣屋での出来事は去年初めて知りましたが、今回は待ち時間で去年見られなかった動画も見る事が出来、去年よりもっと学びを深めることができたと思います。 【3年 伊藤 奈央】

今回の企画に参加してみて、さらにアイヌの生活や文化の理解を深めることができました。木の輪を投げてひっかける遊びをやって2回目で成功しました。やってみると意外と楽しかったです。アイヌに関しては前回の二風谷も行っていたので知っていることが多くありましたが、今回初めて白老の元陣屋に行ったので初めて知ることが多くありました。特に北海道にはないはずの赤松があることに驚きました。植えてから大きく育て、守られていることがすごいなと思いました。元陣屋の歴史が残っていること、資料の多くがとても綺麗な状態で保存されていることもすごいなと思いました。三好監物が切腹したときの刃物が実際に展示されていることが印象に残りました。白老東の生徒の方の説明も分かりやすくアイヌとの関係や仙台藩と幕末の歴史について学ぶことができました。もっと歴史を学びたいと思いました。 【3年 押野 遙音】

今回、この『歴史とSDGsをつなぐ』に参加してみて、伝統芸能上演「シノッ」では、そのタイトルからは予想もできないくらい迫力のある演技で、とても驚きました。また、実際にあった事実から振りができていて、それが何年も受け継がれていると思うと凄いなと感心しました。他にも、アイヌならではの楽器や最後に歌われた曲もアカペラとは思えないほどきれいな歌声で見ていてとても楽しかったです。白老の生徒さん達と一緒にした博物館展示室見学ではネットでは分からない歴史や実物の包丁や衣服などが飾っており、アイヌの人達がどのような暮らしをしていたかを感じることができました。仙台藩元陣屋資料館では白老の生徒さんがガイドをしてくださって、仙台藩とアイヌ民族の関係や三好監物の生涯を楽しみながら知ることができました。最後に今回このWWLに参加してとても楽しかったので、また参加したいと思いました。

【1年 長久 楓佳】

私は白老東高校の生徒と交流をしてお互いのアイヌに関する知識を深めました。その中でも特にアイヌ語話者が日本全体を通して非常に少なく、アイヌ語が絶滅の危機にあることを知りました。大和民族以外の言語が日本国内にほかにもあることをウポポイで知り、その中でもアイヌ語は特に話せる人やそれを継承できる人がいないそうです。そこで数少ないアイヌ文化の継承者の方たちが、アイヌ語教室を開催し後世に「アイヌ」というものを残していこうと活動されていることに非常に関心を抱きました。

仙台藩白老元陣屋では仙台と白老の交流について学びました。私の住んでいる札幌市白石区も仙台藩との関わりがあり、今回の活動の中で一番興味を持っていました。陣屋資料館では三好監物について学び、彼が実地調査をし、陣屋を白老に設置したことで蝦夷地を外国の侵攻から守ったということは北海道にとってとても重要な歴史です。陣屋は三方を山に囲まれており敵に攻め込まれにくい構造となっていました。過去を生きたアイヌ、仙台藩の方々によって蝦夷地は守られ今の北海道になったという歴史に心を打たれました。

【3年 岡田吏欧】

2024.10.11 白老東探究学習事前アンケート

参加者31名

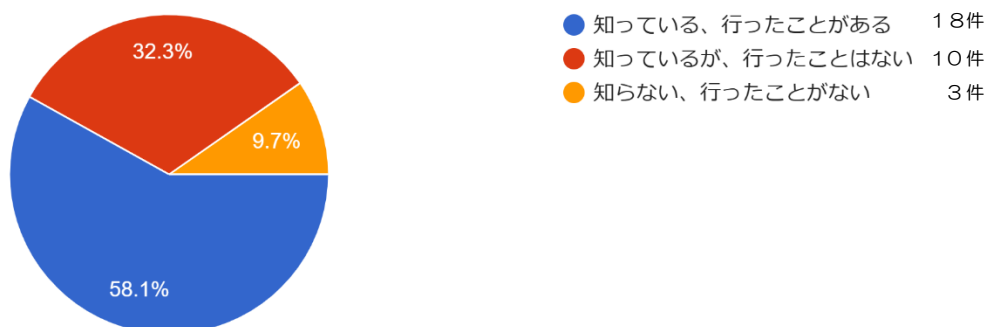
この探究学習に参加する理由は何ですか

31件の回答

- ・ウポポイに興味があった。他4件
- ・アイヌ文化を語り合える貴重な機会であり、意見交流が出来ると思うから。
- ・小学校の頃にウポポイに行ったことがあり、アイヌ文化に興味を持ったからです。
- ・アイヌ民族の生活や文化について詳しく調べたい、聞きたい。他12件
- ・SDGsについてもっと知識を深めたい為。
- ・歴史について知りたと思ったから。
- ・アイヌの人々に元々関心を持っており、この機会に学び直したいと思ったから。
- ・今、別でアイヌの勉強(知里幸恵さん)について調べているから。
- ・中学の時に勉強したアイヌのことを活用しながらアイヌの文化と歴史に再度触れ、白老東高校の生徒と交流を深めるため。
- ・志望している北海学園大学人文学部日本文化学科の公募推薦に使用する推薦書に、このことが書けるから。また、他校との交流をしてみたいと思ったから。
- ・元々アイヌに興味があり、ウポポイにまだ行ったことがなかったのでこれを機にウポポイに行きアイヌについてもっと深く学べると思ったからです。
- ・アイヌと北海道の歴史について学び、より関心を深める。
- ・アイヌ民族への理解を深めるため。他2件
- ・ウポポイをもう一度見に行きたいと思い参加しました。
- ・小中学校のころにアイヌ民族について少しだけ学んでもっと知りたと思ったから。
異文化への興味を深めるきっかけにしたかったから。
- ・WWLの企画に参加したかったから。

『民族共生象徴空間ウポポイ』を知っている、また行ったことがある

31件の回答



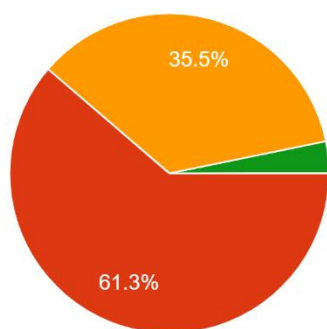
上記質問で『行ったことがある』と答えた方、行った理由を教えてください

18 件の回答

- 修学旅行 他 8 件
- 学校行事 他 2 件
- 中学時の課外活動
- 中学 3 年生の秋ごろに、社会科の教師が自主参加性でウポポイに行く企画を立ててくださり、私自身当時仲の良かった友人に誘われたため参加しました。
- WWL 他 2 件
- 家族旅行

アイヌ文化や生活について、知識がある

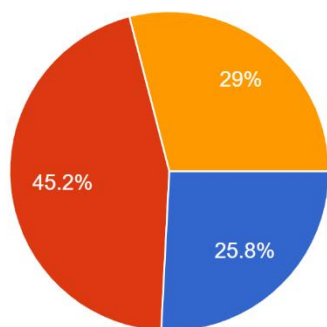
31 件の回答



● 良く知っている	0 件
● 知っている	19 件
● あまり知らない	11 件
● 知らない	1 件

アイヌ文化の情報源は何ですか

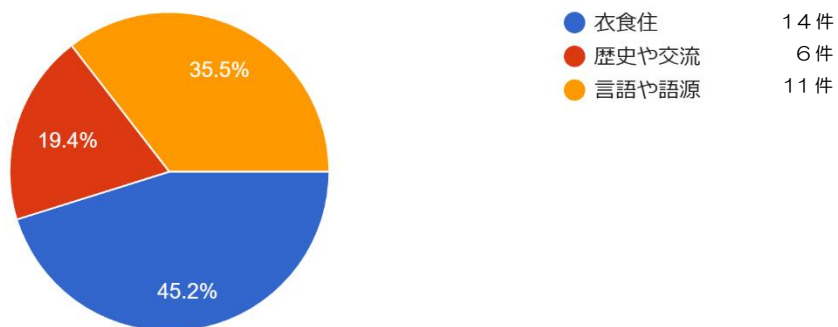
31 件の回答



● 本や資料	8 件
● 授業や講話	14 件
● アイヌ文化施設への訪問	9 件

アイヌ文化に興味あることは何ですか

31 件の回答



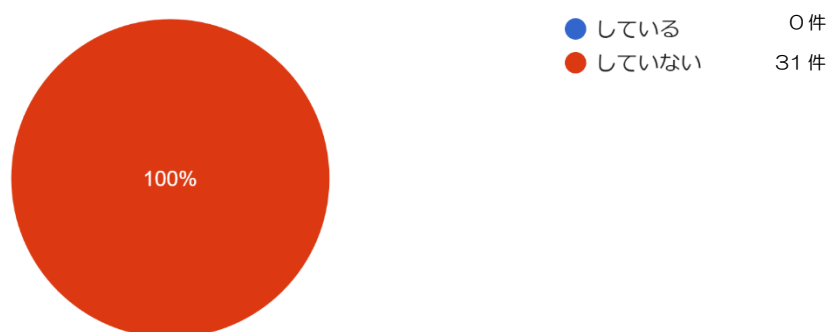
仙台藩白老元陣屋資料館を知っている、また行ったことがある

31 件の回答



資料館で白老東高の生徒さんからボランティア案内を受けるにあたり、事前に質問等を準備している

31 件の回答



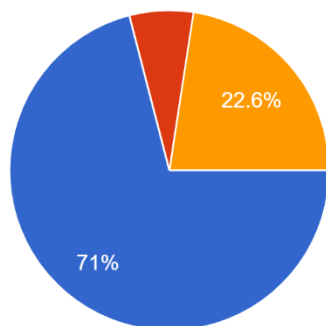
資料館でどんな事を調べてみたいですか

31 件の回答

- 白老の歴史
- アイヌの人たちの言語 他 1 件
- アイヌの衣食住 他 4 件
- アイヌの歴史について 他 1 件
- 人類の歴史
- 白老町の歴史 他 3 件
- 昔の人たちがどのように生活してきたのか
- アイヌの人々の生活について 他 6 件
- 仙台との歴史的関係は深いのでどのような経緯なのか知りたい
- 彼らが考えたカムイについて深く知りたい
- 仙台藩が体験した出来事
- 歴史と今とのつながり 他 1 件
- 当時使われていた道具
- アイヌの生活様式や文化、地域によって違うところなどを出来れば深堀したい
- アイヌの衣食住は私達の生活とどのように変わるのか

今回、楽しみにしている事は何ですか

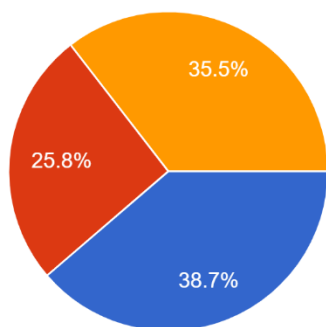
31 件の回答



ウポボー見学	22 件
仙台藩白老元陣屋資料館見学	2 件
白老東高の生徒さんとの交流	7 件

以前にWWLのイベントに参加したことはありますか

31 件の回答



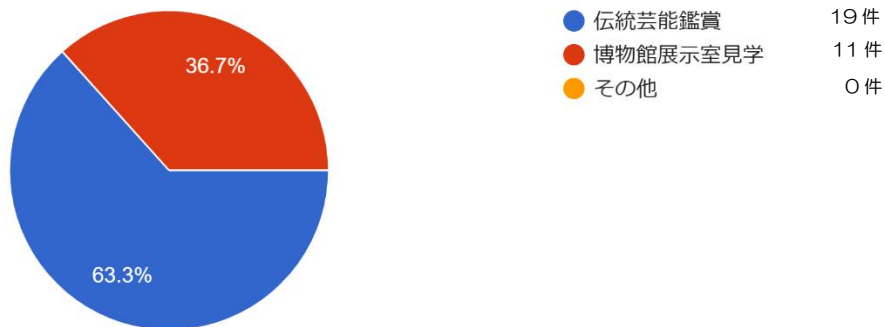
ない	12 件
あります (1回)	8 件
あります (2回以上)	11 件

2024.10.11 白老東探究学習事後アンケート

参加者30名

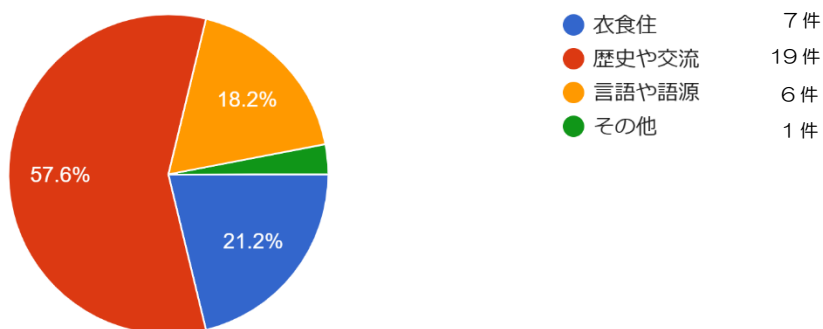
ウポポイを訪問し、一番印象的だったものは何ですか？

30件の回答



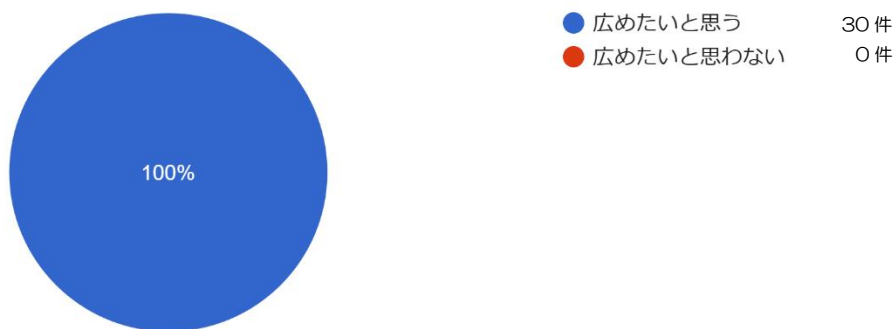
アイヌ文化について新たに得た知識は何ですか？

30件の回答



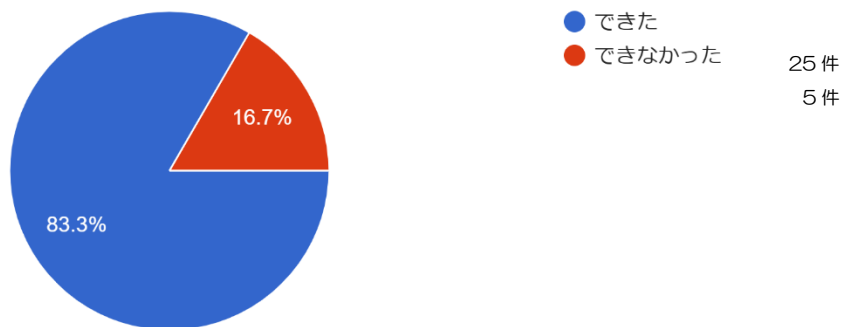
アイヌ文化について知っている事を広めたいと思いますか？

30件の回答



白老東高の生徒さんと積極的に交流できましたか？

30 件の回答



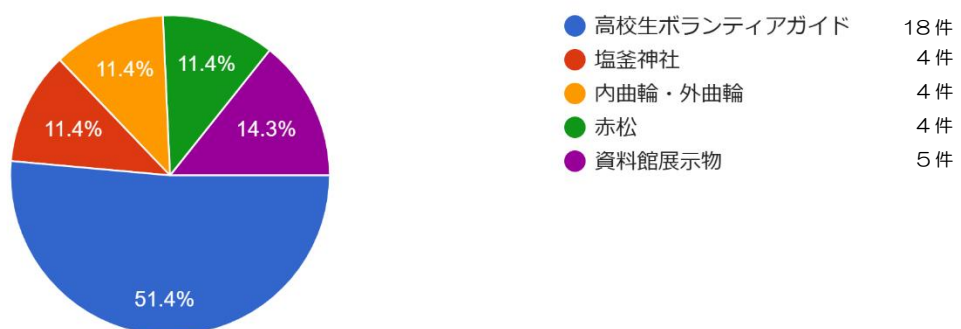
上記質問で、できなかったと答えた方は理由を教えてください（例：時間が短すぎた等）

5 件の回答

- 会話が全くなかった。
- 白老東高校の生徒さんだけでグループのようになっていて、いつ話しかければよいかわからなかったからです。私がもっと人見知りせずガンガン交流しに行けばよかったと後悔しています。
- 話しかけにくい人だった。
- 人見知りをしてしまい積極的には話す事は出来なかった。
- 学年が違ったので話にくかった。

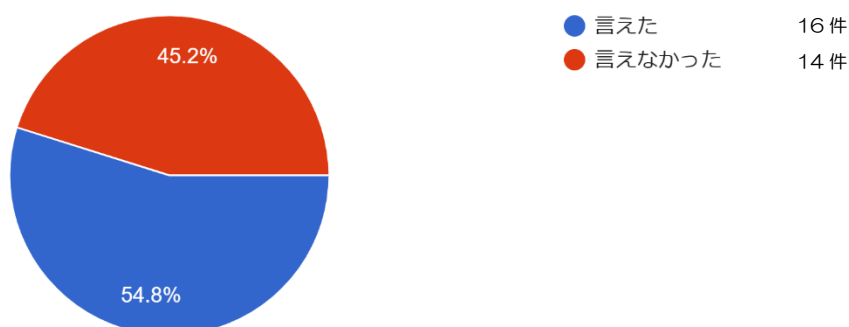
元陣屋資料館で印象に残っている事は何ですか

30 件の回答



高校生ボランティアの方に、質問や意見を言えましたか

30 件の回答



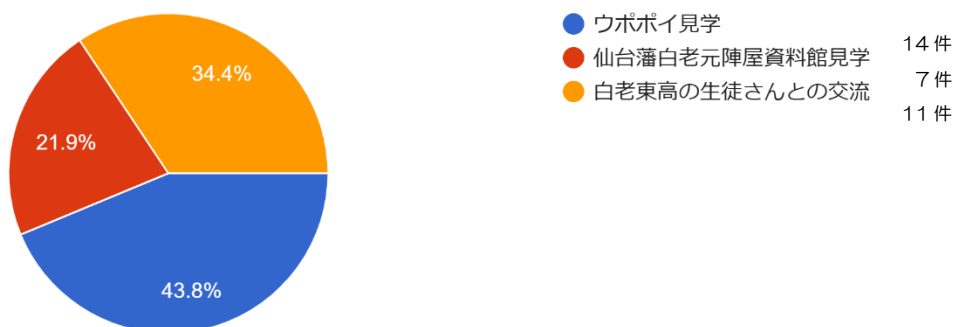
上記質問で、言えなかったと答えた方は理由を教えてください（例：事前準備不足 等）

12 件の回答

- ・ 事前準備不足
- ・ 言うタイミングが分からなかった（他3件）
- ・ 質問時間が取れなかったため
- ・ 高校生の方の説明が分かりやすく質問もあまりなかったため
- ・ 質問する時間がなかった
- ・ 情報を聞くだけで精一杯だったから
- ・ 質問が咄嗟に思いつかなかった
- ・ 緊張
- ・ 言う勇気が出なかった

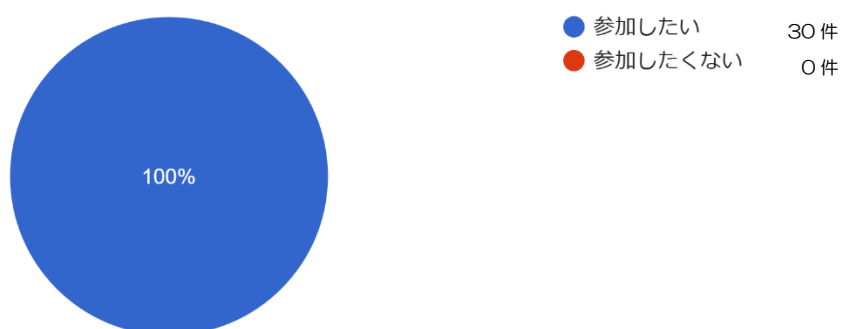
このイベントで一番楽しかった事はなんですか？

30 件の回答



またWWLのイベントがあれば参加したいですか

30 件の回答



WWL で企画してほしい探究学習があれば教えてください

3 件の回答

- ・ 英語を使う行事
- ・ 海外の留学生と一緒に活動する。 英語を使って料理をしてみたい
- ・ 工場見学的なもの

北方領土について考える WITH 北海道根室高等学校

教諭 三浦 琢斗

1. はじめに

1. 目的

北方領土問題の観点から SDGs GOAL17 『パートナーシップで目標を達成しよう』の目標達成のためのプロセスを日常生活に応用していくことの重要性を培うことを目的とする。

2. 日時

令和6年10月30日（水） 10:35—14:35頃まで（3～6時間目）

3. 概要

映画『ジョバンニの島』視聴

根室高校 北方領土根室研究会オンライン講演

2. 報告

①『ジョバンニの島』

北方領土を舞台にロシアと日本との関わりが描かれており、非常に感慨深い作品でした。特に、現実ない戦争であったり、領土問題に関しての知識をストーリーの中で感じることができ、非常に貴重な機会となりました。

②根室高校オンライン講演会

北方領土返還運動や北方領土への心を高める活動に、同じ高校生である根室高校の北方領土根室研究会の生徒さんたちが積極的に関わっていること、私たちが今できることは何かを講演を通じて学びました。オンライン講義と交流が終了した後は、それぞれレポート作成を行いました。

私たちができること

- 署名にサインをする
昭和40年から現在の署名人数は約9100万人
- 現在の北方領土を広める
- 領土問題の知識を深めつつ周りの人に伝え改善に向け取り組む
- 世界の歴史について深く知る
- 外国との関係を良好にする

SNSでの広報活動

- 北方領土問題の理解と関心を高める活動
「エリカちゃん」「エリオくん」
北方領土の返還を強く訴えおり
強気な抗議の姿勢とツイートが話題を呼んでいる



3. まとめ

今年度も貴重な機会を提供していただきました北海道根室高等学校の北方領土根室研究会の先生、生徒の皆様、北方領土復帰期成同盟の皆様にご心よりお礼を申し上げます。

2024 年度 ポートランド州立大学研修旅行 実施報告

長山 美咲

1. はじめに

【研修日程】2024 年 10 月 25 日(金)～11 月 15 日(金)

【研修先】アメリカ オレゴン州 ポートランド

【参加生徒】2 年 C 組(グローバルコース)30 名 (男子 10 名・女子 20 名)

【引率教諭】長山美咲(2 年 C 組担任) マークホロウェイ(2 年 C 組副担任)

【目的】

- ・ 「日常英会話」から一步進んだ「実践的な英語」を身につける
- ・ プレゼンテーションの準備を通して、グループで課題を見つけ、目的達成に必要な情報収集、処理能力を身につけ、協調性や自主性を育む
- ・ 実際の環境への取り組みを知ることで SDGs への理解をより深め、今後のプレゼンテーションの発表、学校生活、自分の将来に繋げる知識を身につける
- ・ 現地の文化や習慣に触れ、学生やスタッフ、ホストファミリーとの交流を通して異なる価値観や新しい考え方を知る

【活動内容】英語力の向上を目指した英会話の授業、アメリカの文化や SDGs についての授業及びプレゼンテーション発表、有名な観光スポットの訪問、非営利団体でのボランティア活動、グラント高校の生徒や現地留学生との交流

【プログラムスケジュール】

※活動の詳細につきましては本校ホームページに滞在中の日々の記録を残している。

トップページの「NEWS」⇒「NEWS 一覧を見る」⇒「グローバルコース」⇒「アメリカ ポートランド研修①～⑬」

10/25	新千歳空港⇒羽田空港⇒サンフランシスコ国際空港⇒ポートランド国際空港 (ANA / ユナイテッド航空) 空港でホストファミリーと対面し、そのままホームステイ先へ帰宅
10/26-27	休日
10/28	オリエンテーション、キャンパスツアーなど
10/29	午前:英語・SDGs の授業 午後:地元の方も買い物を楽しむ NW21st&23 rd 付近を街歩き
10/30	午前:英語・SDGs の授業 午後:古着屋が多くあることで有名な Hawthorne を街歩き
10/31	午前:英語・SDGs の授業 午後:Oregon Historical Society という博物館を訪問、Pioneer Square というショッピングモールでショッピング
11/1	午前:英語・SDGs の授業 午後:PSU Sustainability Tour と留学生とのディスカッション、アメリカンフットボール

	観戦
11/2-3	休日
11/4	午前:英語・SDGs の授業 午後:非営利団体 Oregon Food Bank でのボランティア
11/5	グラント高校に訪問し授業参加や交流など。その後、Portland Visitor Center と「世界最大の独立系書店」である Powell's Books へ
11/6	午前:英語・SDGs の授業 午後:コロンビア川峡谷(マルトノマ滝・ボンネビルダム・養魚場)
11/7	午前:英語・SDGs の授業 午後:大学のジムで運動
11/8	午前:英語・SDGs の授業 午後:フリータイム (観光や食べ歩きなど色々楽しんだようです。)
11/9-11	休日
11/12	午前:英語・SDGs の授業とプレゼンテーション準備 午後:Japanese American Museum of Oregon 訪問、Voodoo Doughnut
11/13	午前:プレゼンテーション発表 午後:修了式
11/14-15	ポートランド国際空港⇒サンフランシスコ国際空港⇒羽田空港⇒新千歳空港 (ANA / ユナイテッド航空)

2. 研修報告

(1)授業について

授業は昨年同様、15名ずつの2クラスに分かれて実施した。担当の先生方は昨年度も本校の生徒を指導して下さった方々で、生徒のレベルを十分に把握したうえで授業を進めており、大変スムーズであった。英語の授業内容は実用的で、ホームステイを含むアメリカでの生活で役立つ単語やフレーズを学ぶほか、午後のアクティビティに関連したテーマを取り上げるなど、工夫が施されていた。たとえば、ヴィンテージショップが多く並ぶホーソー通りを訪れる日の午前中には、服に関するSDGsを英語で学ぶなど、学びと体験がリンクする構成であった。少人数制で授業がすべて英語で行われたため、生徒が発言する機会も多く、大変充実した時間だったと感じる

(2)プログラムについて

今回初めてポートランド州立大学での研修に携わったが、これまで行っていたブロック大学での研修と比較して、内容が格段に充実していると感じた。プログラムは、午前中に大学で英語の授業を受け、午後は観光地巡りやキャンパスツアー、ボランティア活動などで構成されていた。英語学習だけでなく、ポートランドの持続可能な取り組みに触れる機会があり、生徒たちにとって英語を学ぶだけでなくSDGsについて深く考える貴重な経験となった。また、ポートランド州立大学は環境に配慮したキャンパスづくりを目指しており、そのさまざまな工夫を直接見る事ができた点も大きな収穫である。

さらに、現地のグラント高校を訪問し、日本語を学ぶ生徒たちと交流する機会があったが、これは非常に意義深い体験であった。グラント高校の生徒たちの日本語は非常に流暢で、それを目の当たりにした本校の生徒たちは感激するとともに、「自分たちも頑張らなければ」という刺激を受けていた。また、日本語の授業に参加し、アメリカの高校の授業を実際に体感できたことも、良い経験となったに違いない。欲を言えば、グラント高校の訪問日を増やしてほしいくらいである。同年代の生徒と直接交流する機会は、生徒たちにとって非常に大きな影響を与えるものである。

また、現地スタッフの協力も非常に心強いものだった。何か相談や不安なことが生じた際には、親身になって問題解決に取り組んでくれたことが、大きな支えとなった。現地スタッフは、プログラムの成功に向けて全力で取り組んでおり、その姿勢には感銘を受けた。また、スタッフの中にはポートランド州立大学に留学中の日本人もおり、生徒たちが留学の具体的なイメージを持つうえで役立ったのではないかと考える。

(3)ホームステイについて

今年度のホームステイは、クラスの約半数が「日本人 1 人に 1 家庭」、残りの半数が「日本人 2 人に 1 家庭」という形式であった。「日本人 2 人に 1 家庭」という形式にも多くのメリットがあるが、英語力向上や自己成長の観点から考えると、理想としては全員が「1 人 1 家庭」でのホームステイを経験できることが望ましい。

ホームステイに関しては、出発前から「過度な期待をしないこと」と「他のホームステイ先と比較しないこと」という 2 点を、自身の経験も交え生徒たちに繰り返し伝えてきたつもりであった。しかし、実際にアメリカでホームステイを始めると一部の生徒の中には、「理想とするホームステイの姿」と現実とのギャップに戸惑う様子が見られた。たとえば、生徒たちが理想とするホストファミリー像には、「白人」「子どもがいる」「両親が揃っている」「毎週末お出かけする」などの条件が含まれることが多かった。

これについては、「過度な期待をしないこと」と「他の家庭と比較しないこと」を教員が根気強く伝え続けることが重要である。しかし、実際に経験しなければ理解できない部分も多いため、最終的には良い人生経験となったと考えている。「世の中すべてが思い通りにいくわけではない」という現実や、アメリカの多様性を身をもって学ぶことができた生徒もいただろう。

3.まとめ

留学前教育として出発前からオンライン英会話や朝の英語スピーチ、授業内での英語プレゼンテーションなど、英語を話す機会をできる限り設けてきたことは、効果的な取り組みであったと考える。これらの留学前教育と 3 週間の学びが相乗効果を生み、生徒たちの英語を話すことへの抵抗感がさらに薄れたように感じる。同時に、英語学習への意欲も大きく高まったと考えられる。しかし、時間が経つにつれて意欲が低下する傾向や、「頑張りたい」と思いつつも行動に移せない生徒がいるため、教員が継続的に適切に支援することが求められるだろう。

また、生徒たちは英語だけでなく、さまざまなことに積極的に挑戦する中で、前向きに行動する力を身につけたと感じる。今回、生徒たちには日記を毎日英語で書いてもらい、平日は教員がそれを確認する

取り組みを行った。その日記からは、生徒たちが日々新しいことに挑戦し、反省を重ねながら成長していく姿が伝わり、感銘を受けた。

高校2年生の段階でアメリカに3週間留学できたことは、生徒にとって非常に貴重な経験であった。楽しかったことも大変だったこともすべて良い人生経験になっただろう。アンケート結果によると、全員が「また海外に行きたい」と回答しており、今後も海外でさまざまな文化に触れながら自己成長を遂げてほしいと願う。日本だけでなく海外でも通用する人材を目指し、日々の学習に励むことを期待している。

4. 生徒事後アンケート（※数名分抜粋）

(1) 3週間の研修を通して、英語力と自分自身を向上させるために、どんなことに挑戦したか。

- ・恥を捨てて積極的に発言することに挑戦した。
- ・グーグル翻訳などは使わないようにして、わからない単語や言いたくても言えなかった単語は後で自分で調べてまとめた。
- ・伝えたい文ごとと翻訳するのではなく、分からない単語だけを調べて自分で文を作って話すようにした。
- ・日記にやったことや思っていることなど英語でたくさん書いた。
- ・ホストマザーとの会話で出来るだけ翻訳機的なものを使わないようにした。お店でも出来るだけそのまま喋ろうとした。
- ・とにかく色々な人と話すことを心がけた。なるべく翻訳は使わないで、伝えることを意識した。新しく覚えた言葉はすぐにメモしたりして忘れないようにした。英語の映画を字幕無しで見てホストファミリーに詳しく質問するなどした。
- ・とりあえず話してみることで自分から動くこと。
- ・積極的に話し、色々な単語や表現を使ってみた。
- ・ホストファミリーと積極的にコミュニケーションをとるようにしたり、授業でしたことをホストファミリーに伝えたりして英語力を向上させた。
- ・日本語を話せる人とも英語で話してみた。

(2) ホームステイ先での過ごし方として大切だと思うことは何か。また、実際にホームステイを経験して、大変だったことやホストファミリーとのかかわり方で工夫してみたことは何か。

- ・ホームステイでは、ホストファミリーと話して家族で楽しむのが大切だとわかった。最初の方は英語を調べて話していたが、最後は英語を調べなくても少しは話せるようになった。
- ・宗教や、相手の国の文化を積極的に学ぶこと。たくさん話すこと
- ・ホストファミリーとたくさんコミュニケーションをとり、食事などに対しても感謝を伝えていた。衛生面に関

しては日本よりも現地の人の意識は若干低いので気になる部分は自分たちで解決しなければならなかった。

- ・正直大変だったけど頑張った。コミュニケーションを取るのを頑張ったからコミュニケーションが1番大事だと思う。
- ・向こうの家の習慣に合わせることや自己主張すること
- ・人に頼りきりにならないこと。自分から動けば楽しく過ごせた。
- ・部屋にこもらないでリビングで家族との時間を楽しむこと。
- ・失礼なことは絶対にしない、良いと言われていないものは勝手に使わない・触らない・見ない。
- ・ちゃんと自分の気持ちや意思を言葉に出して伝える。感謝の言葉をたくさん伝える。
- ・常に笑顔で会話をたくさんする。
- ・部屋にこもらずに、リビングでみんなとテレビをみたり会話をしたりすることが大切だと思った。
- ・たまに苦手な食べ物が出てきて食文化の違いはやはり大変だと思った。
- ・ホストファミリーと共通する趣味について沢山話して仲良くなった。
- ・日本と生活の仕方や食べ物など違うのは当たり前だから、自分に合う合わないも経験だと思って過ごすのが大切だと思った。食べ物が合わなかったのが少し大変だったが、ホストファミリーがおいしいご飯を作ってくれてよかった。
- ・礼儀を忘れないこと、ちゃんと沢山コミュニケーションをとることも大切だと思った

(3) 留学を通して自分自身一番成長したと思うところはどこか。

- ・積極性
- ・コミュニケーション能力
- ・みんなの前で発言できるようになった
- ・英語に対する苦手意識が少なくなったこと
- ・自己解決力
- ・諦める力
- ・英語に取り組む姿勢の向上
- ・怖がらずにまず挑戦しようと思えたところ
- ・リスニング力がとても上達したと思う。前までは聞き取れなかった単語や言葉も今ではスムーズに聞き取れるようになった。

- ・起床、洗濯など生活の面で成長できた。
- ・行く前より自立できたこと。
- ・社交性

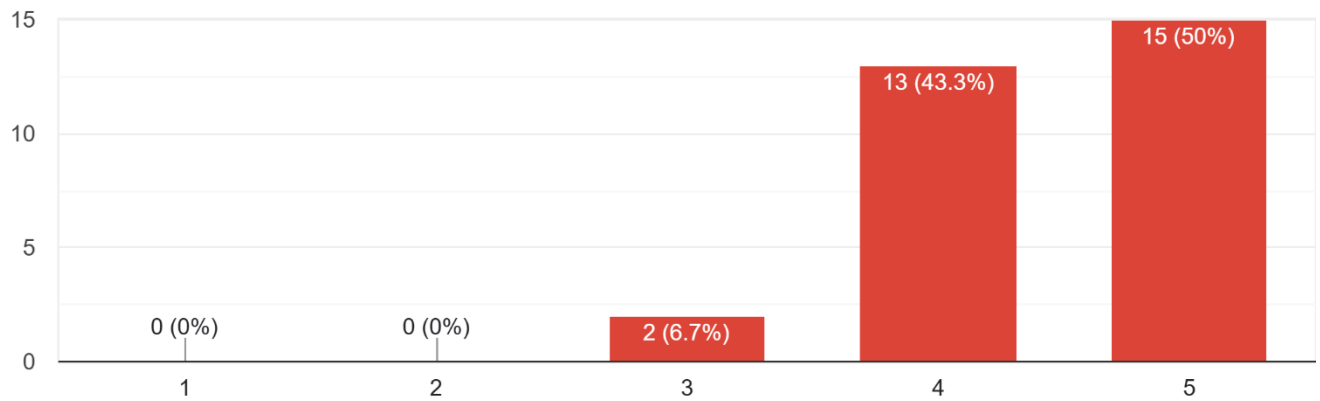
(4)研修全体を通して、思い出に残ったことや学んだことなど自由に記述しなさい。

- ・英語をこんなに話す経験は今まで無かったのですごく大変だったけど色んな人と仲良くなれて、日本との違いなどもたくさん学べて良かった。
- ・アメリカで友達とご飯を食べたりしたことや友達と行動したりしている時
- ・すべての経験が新鮮で楽しかった。
- ・普段生活しているだけでは経験できないようなことをたくさん経験できてすごく楽しかった。
- ・クラスメイトといろんな体験を共にするのはとても楽しく充実した3週間だった。
- ・他人と生活するのは大変だしカルチャーショックなども感じるが、こういう経験をすることができたことに感謝しないといけないと思った。
- ・自然が大学の中にもあり紅葉などが綺麗だったこと。
- ・全体を総じて楽しかった気持ちが強い。高2のうちにこの留学を経験できたのが1番大きい。
- ・海外の人と初めて長い間触れ合って異国を体験できたことや新しい世界を学べたこと
- ・アメリカの人はみんなフレンドリーで誰に話しかけても沢山話してくれるところが新鮮で、普通の日々でさえ思い出だった。
- ・英語での授業や自由時間の買い物
- ・SFOでパイロットに話しかけて写真を撮ったこと。ホストシスターの誕生日パーティー、誕生日ディナーと一緒に参加したこと。
- ・アメリカの様々な価値観や社会情勢などを自分の肌で実際に感じる事ができた。
- ・飲食店とかで注文する際に使うフレーズのよりナチュラルな言い方なフレーズを学んだ。
- ・ホストファミリーが飼っている犬達と散歩に行ったことが思い出に残った。言語が違えば犬達にかける言葉も違うのかと思えば日本語とあまり変わらずそこに関しては世界共通なのだったと思った。
- ・楽しいことだけではなくし帰りたいと思うことのほうが多かったけど、最後は良い経験として残る。
- ・1番はホストファミリーと過ごしていた3週間。私はホストファミリーが一時期変わったりと色々ありましたが会話をして共通の話題で盛り上がれた時や、日本の文化や日本語を教えてびっくりしたり褒めてもらえたことはとても嬉しかったし思い出に残った。
- ・休日にホストファミリーとビーチやショッピングモールに行ったことが思い出に残っている。

・日本にいる時より友達との仲も深まったと思うし、ホストファミリーと色々な場所に行って思い出を作ったりしてとても楽しい3週間を過ごせた。

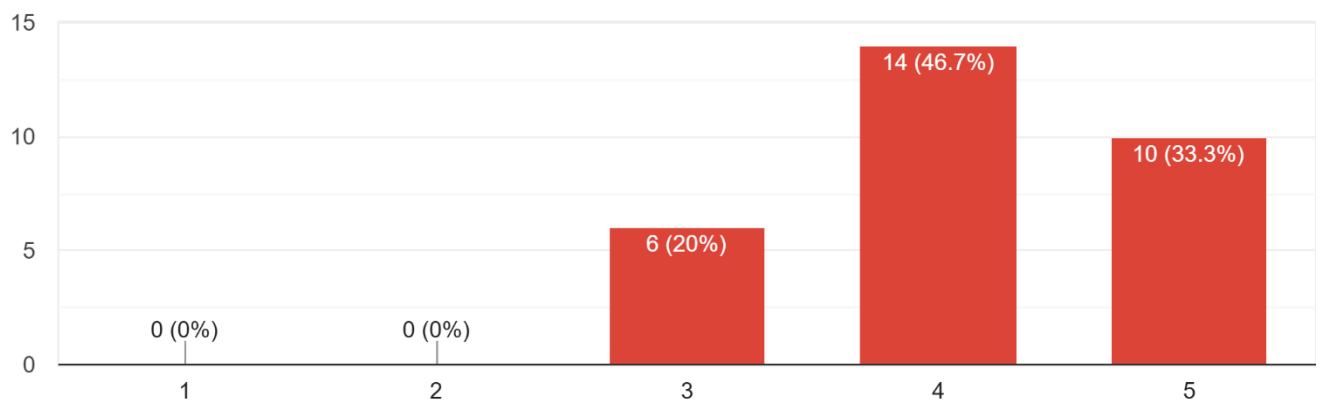
研修全体の満足度 1(低)-5(高)

30件の回答



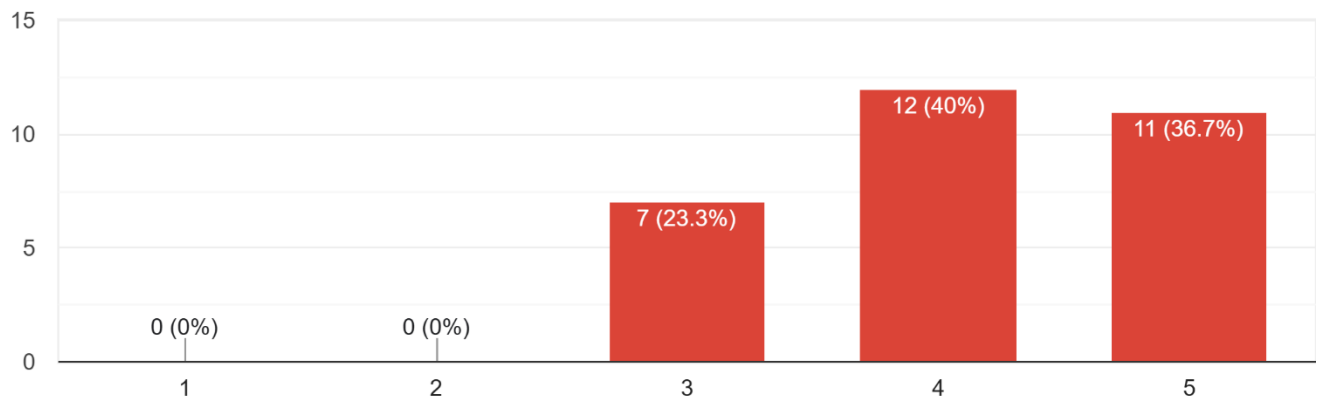
英語力の伸びを実感した 1(いいえ) -5(はい)

30件の回答



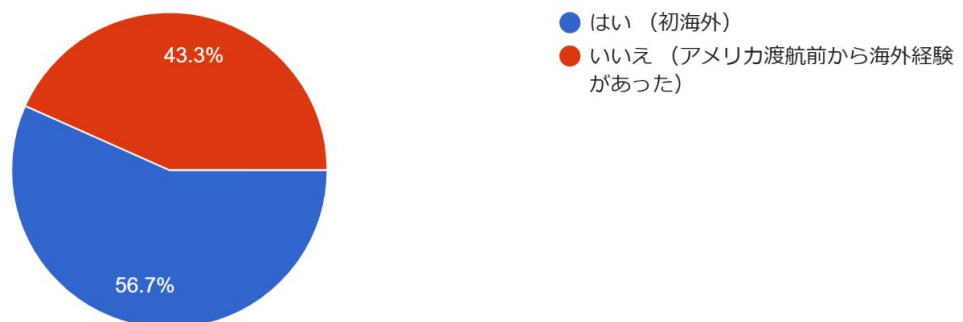
SDGsへの理解が深まった 1(いいえ)-5(はい)

30 件の回答



今回のアメリカ研修が初海外でしたか？

30 件の回答

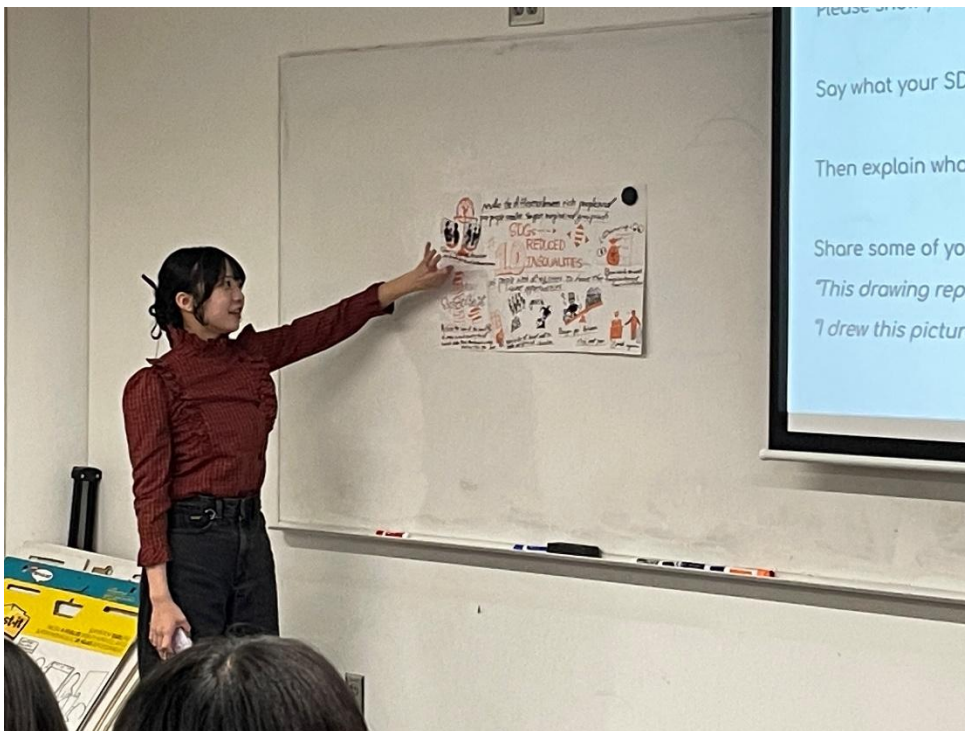


また海外に行きたいですか？ (旅行でも留学でも)

30 件の回答







※写真やグラフのレイアウト

おまかせします

ENGINEERING LABO 2024 活動報告

小笠原 裕介

1. はじめに
2. ENGINEERING LABO 2024 概要
3. ENGINEERING LABO 詳細
4. WWL 高校生国際会議
5. 参加生徒アンケート
6. ENGINEERING LABO 実施後の理系生徒の動向
7. おわりに

1. はじめに

近年、学校現場においては従来までの文系・理系という学問の捉え方での学びではなく、幅広い分野を学び、社会での活躍に必要な「課題解決力」を育成するための取り組みが求められる。また、本校は 2021 年度より文部科学省 WWL コンソーシアム構築支援事業のカリキュラム開発拠点校（以後、WWL）に指定されている。「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に掲げられた、「持続可能な開発目標」（Sustainable Development Goals、以後 SDGs）をテーマとして、環境保全や人類平等など様々なカリキュラム開発に取り組んでいる。このことより、北海学園大学工学部と本校の高大連携事業での活動も工学の視点から SDGs を考え、実験や実習に取り組み、近年求められている能力である「課題解決力」を育てていくこととしている。

北海学園大学工学部－北海学園札幌高等学校の高大連携事業である ENGINEERING LABO（以後、E. LABO）がスタートして 4 年目になる。上述した理由から E. LABO は、生徒がそれぞれのテーマにもとづき、学習や実験、実習を行う。さらに、学んだことを社会問題解決のためにどのように生かすべきかと考察し、パワーポイントを作成し発表までおこなう活動をしている。また、WWL の活動と共に行うことで、様々な高校や大学、関係機関や企業へ活動を発表する機会があり、工学の視点から考える SDGs について共有することができる。さらに、成果発表会において高大連携の新しい姿を発信することができる。

E. LABO の『ねらい・到達目標』としては、次の 4 つである。

- ・北海学園大学工学部への興味・関心を高め、理系選択生徒の数を増加させることにより、北海学園大学工学部への進学者を増加させる。
- ・WWL コンソーシアム構築支援事業との協力により、大学で学習・実験等をおこなったことに対して、SDGs との関係を考察し、社会をよりよくするための提案等を行う。
- ・従来の講演型の高大連携からの脱却。
（インプット型からアウトプット型へ、学習→経験→考察→発信）
- ・大学の内容を、高校生が取り組めるように行う。

本校では、2 年次から理系・文系に分けられ、理系は化学（必須）と物理もしくは生物を選択することとなっている。表 1 に示す通り本校の理系選択者の 8 年間平均（2017～2024 年度）は生徒（2・3 年生）の 15%程度であるのが現状である。E. LABO や工学などの理系学部の魅力を発信していき、今後この数値を 25%程度まで引き上げていきたいと考えている。本校の理系・文系の科目を選択する時期は、1 年次の冬となっていることから、自然科学分野への興味関心を高めるためには 1 年次（特に夏から秋にかけて）が重要である。このことより、10 月から 12 月に開催される E. LABO は自然科学分野の探究を経験させ、興味を持たせるためには絶好の機会となっている。

表 1 理系生徒の推移（2017～2024） 2・3 年生のみ									
※化学は理系生徒は必須									
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	8 年平均
特進 生物	17	24	25	14	21	14	22	23	20.0
特進 物理	16	12	14	18	16	15	36	38	20.6
総進 生物	23	23	24	52	49	41	56	38	38.3
総進 物理	36	27	23	34	33	44	54	32	35.4
計	92	86	86	118	119	114	168	131	114.3
生徒数（2・3 年生）	557	630	717	732	744	747	861	869	732.1
理系割合	16.5%	13.7%	12.0%	16.1%	16.0%	15.3%	19.5%	15.1%	15.6%
					ELABO 1 年目	ELABO 2 年目	ELABO 3 年目	ELABO 4 年目	

2. ENGINEERING LABO 2024 概要

北海学園大学工学部長の植松先生をはじめ、工学部各学科の先生のご協力をいただき、北海学園大学工学部－北海学園札幌高等学校の連携事業である ENGINEERING LABO を開催することができた。今年度は E. LABO 2024 を開催するにあたり、今までの取り組みに対して工学部の先生より振り返りを頂戴することができた。主な内容としては

- ①E. LABO にて取り組む内容のレベルに関して
- ②E. LABO 開催前の事前打ち合わせに関して
- ③生徒への課題に関して
- ④PPT 確認・修正時間の確保に関して

であった。生徒にとってより良い取り組みになるように。また、北海学園大学工学部・北海学園札幌高校の双方にとってメリットのある取り組みにするために、「1. はじめに」に記載した通り、E. LABO の『ねらいや到達目標』を明確にして取り組むこととした。参加生徒の学年や能力、意識の高さも様々なため、高校と大学の連絡を密にすることで振り返りに対してより良い方向性を示し実行することができた。

昨年度同様に8月下旬に全校生徒を対象に参加生徒(20名程)を募集したところ46名の生徒の応募があった。その後、工学部との調整により参加可能人数を43名と増員をしていただいた。残念ながら、3名の生徒(1年生)の参加は叶わなかったが、E.LABOを開始して以来、最大の人数の参加となった。参加者のうち3年生は主に北海学園大学工学部に進学を志すもの、1年生は工学や理科、探究やプレゼンテーションに興味があり理系選択を考えている生徒であった。

今年度は参加人数が多いということから、豊平キャンパスと山鼻キャンパス間の移動には大学が運航している連絡バスを利用せずに、高校バスを使用することとした。

期 日	1回目	10月8日 (火) 午後	北海学園工学部にて講義・実験・実習(建築学科のみ)
		10月18日 (金) 午後	北海学園大学工学部にて講義・実験・実習
	2回目	11月1日 (金) 午後	北海学園大学工学部にて講義・実験・実習
	3回目	11月5日(火)～7日(木)	PPT作成、発表原稿作成
	4回目	11月14日(木) 午後	PPT修正、発表練習
	5回目	12月11日(水) 午後	PPT修正、発表練習
	6回目	12月12日(木)	WWL 高校生国際会議にて発表

参加生徒	3年生	14名(5名)	
	2年生	0名(13名)	
	1年生	29名(6名)	
	計	43名(24名)	※カッコ内は昨年度の参加者数

内 容(第1・2回)

①「橋が力を支える仕組みを考えよう」

Goal 11. 住み続けられるまちづくりを

社会環境工学科 金澤 健 先生

概要: 橋の部材にかかる力の計算、パスタ橋の作製と載荷実験を行い、橋の仕組みを考える。

②「空間において光や風を感じるということ」

Goal 4. 質の高い教育をみんなに

Goal 12. つくる責任、つかう責任

Goal 15. 陸の豊かさも守ろう

建築学科 三澤 温 先生

概要: 1回目は知識や2回目に行う作業の工程を学び、2回目は手のひらサイズの模型の工作作業を行う。最終的にはそれぞれが工作したものを連結し、1つの大きなものに合体する。

③「乱雑な構造でレーザーを作る ～ランダムレーザーの仕組みと応用～」

Goal 9. 産業と技術革新の基盤を作ろう

応用先として (3. すべての人に健康と福祉を 6. 安全な水とトイレを世界中に 7. エネルギーをみんなに。そしてクリーンに)

電子情報工学科 藤原 英樹 先生

概要：1 回目は、光やレーザー発振のメカニズム、および「ランダムレーザー」やその応用について紹介をする。2 回目は、酸化亜鉛ナノ粒子を用いてランダムレーザーを作り実験装置を使って試料の発光分光測定を行う。結果をパソコンでグラフ化し、データの作成も行う。

④「PCR を使った身近な植物の DNA 解析」から考える SDGs

Goal 15. 陸の豊かさも守ろう

生命工学科 新沼 協 先生

概要：一見同じに見える植物であっても DNA レベルでは大きく異なる。この実験では、見た目では識別することが難しい身近な 2 つの植物について、自分で実際に PCR を行って DNA レベルでの識別に挑戦する。結果をもとに、植物の遺伝的多様性について考える。

内容（第 3 回）

- ・講義や実験、実習をもとに PPT、発表原稿を作成する。
- ・完成した PPT を各学科の先生に確認してもらい、大学の先生よりアドバイスをいただく。
(今年度は 11 月 7 日に大学の先生に送信)

内容（第 4 回）

- ・いただいたアドバイスをもとに、PPT と発表原稿の再検討を行う。
- ・発表練習を行い、内容や文言の修正を行う。
- ・修正した PPT を各学科の先生に確認してもらい、アドバイスをいただく。

内容（第 5 回）

- ・いただいたアドバイスをもとに、PPT と発表原稿の再検討を行う。
- ・発表練習を行い、内容や文言の修正を行う。

内容（第 6 回）

- ・北海学園大学にて開催された WWL 高校生国際会議にて研究内容、結果、考察、今後の展望、SDGs との関り等をプレゼンテーションする。(7 分程度)
- ・プレゼンテーションは文科省関係者、協力大学、協力企業、WWL 支援事業の協力校生徒に対面にて行う。本校 HP にて公開。

3. ENGINEERING LABO 詳細

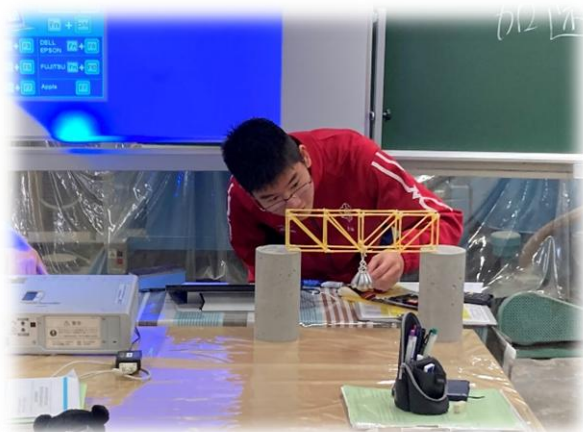
○第1回 10月8日（火） 建築学科

10月18日（金）社会環境工学科、電子情報工学科、生命工学科

学校バスを利用して北海学園大学工学部に向かった。工学部に到着したあとは、事前に知らせていたこともあり、学食で昼食をとる生徒が多くいた。また、校舎内をまわり見学している生徒もいた。このようなところからも大学を感じているようであった。その後、ENGINEERING LABO 2024 の開講式にて、工学部長の植松先生から「大学の楽しさ」についてのお話をいただき、各学科の先生方の紹介を行ったあと、講義室や研究室に向かった。

例年通り、第1回は講義や実習準備等を行った。生徒たちは、高校では学ぶ機会がないことについて熱心に耳を傾け取り組んでいた。また、普段使用しない機械や実験器具の使用に関して、目を輝かせながら一生懸命操作方法を学び、実際に操作をしていた。自らの意思でE. LABOに参加している生徒達のため、非常に熱心な態度ですごしていた。

第1回の実習は、講義や次回の実験のための準備や基礎知識を得ることに主眼をおいていたため、2時間程度で終了した。終了後、高校に戻り図書室をお借りして要点整理やまとめ、感想をレポートにまとめさせた。レポートを作成することで、本日受講した講義や実習で経験したことをより深く理解する良い時間となった。



○第2回 11月1日（金）

第2回のE.LABOは、1台のバス（定員29名）に全員乗車することができなかったため、本校教員の助けを借りて、2台の学校バスで大学まで向かった。第1回で学んだことを生かし、各学科で様々な実験や実習が行われた。

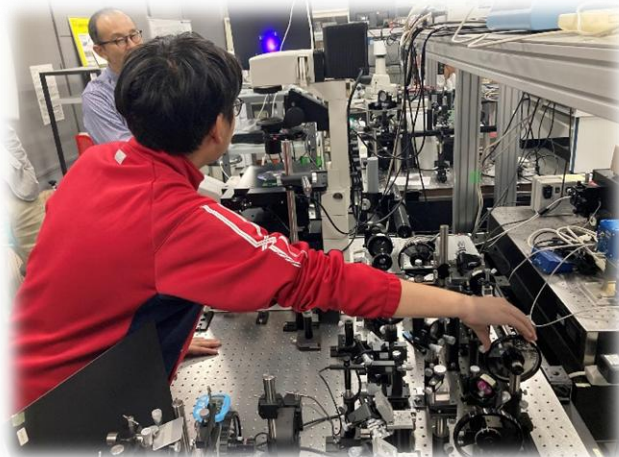
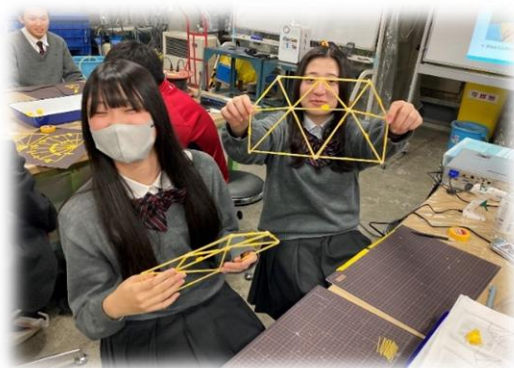
社会環境工学科では、第1回に出された課題（パスタブリッジの設計図）をもとに、各班が考える最も強度の高い構造のパスタブリッジを製作した。その後、パスタブリッジを使用し載荷コンテストを行い、強度の高い橋の構造についての検討を行った。

建築学科においては、建築において快適性、機能性、精神的な効果に大きな影響を与える光や風について検討するために、北欧フィンランドの伝統的な装飾品であるヒンメリを作成した。また、コミュニケーションを通じてより良いものを創造することについて学んだ。作成したヒンメリは高校へ持ち帰り校内に設置した。

電子情報工学科においては、ランダムレーザーについて学び、実際にレーザーを確認することや、特性などを実習によって確認した。その後、ランダムレーザーの活用方法などを検討した。

生命工学科においては、PCR法を用いてアサガオの同定を行った。PCR法によって増幅した遺伝子を解析するために、電気泳動法なども学び実践した。その後、PCR法の活用方法などを検討した。

すべての実習終了後にENGINEERING LABOの閉講式を行った。その中で工学部長の植松先生より今後の学校生活へのエールを頂いた。実験や実習が主だったこともあり、生徒たちの満足度は第1回よりも高い傾向にあった。



○第3回 11月5日（火）～7日（木） 4時間目～放課後20時頃迄

第4回 11月14日（木） 4時間目～放課後19時頃迄

第5回 12月12日（水） 4時間目～放課後18時頃迄

11月5日（火）～11月7日（木）の3日間、午後からの授業を公欠とさせていただき、成果発表会へ向けてパワーポイントとその発表原稿を作成した。今年度は参加者が43名と非常に多かったため、3年生を中心として各学科5～6名で発表チームを組みPPT作成に取り組むこととした。（計23名）また、建築学科で作成したヒンメリは11月5日（火）より校内の数か所に設置し、それを見た生徒の様子の観察や感想を聞くなど、実際にどのようにとらえられているかを調査した。11月7日

（木）の夜までに作成し、4学科の先生方へPPTをメールにて送付させていただいた。例年、レクチャーやテンプレートを与えてからPPT作成を行っている。年々、PPT作成のためのパソコン操作能力は向上していると感じるのと同時に、順序よく論理的に説明する力を付けさせることの難しさを実感する。物事を論理的に説明する能力を付けさせていくことが課題だと感じた。

第4回・5回共に各学科の先生から、よりよい発表をするために様々なアドバイスやデータ等を頂くことができた。アドバイスを頂いた個所はもちろん、それ以外の箇所の修正も行い、発表原稿作成や発表練習に取り組んだ。第5回の際はE.LABO参加者全員の前で発表練習を行うこともできた。例年、PPTや発表原稿作成のために設定する日程が非常に短かったが、今年度は時間に余裕をもって取り組むことができた。さらに、大学の先生と2回のやり取りをすることができ、熱心にご指導をいただけたため、PPTの完成度が非常に高くなった。



4. WWL 高校生国際会議

12月13日(金)に北海学園大学7号館で開催された WWL 高校生国際会議にて、E. LABO の研修成果を発表することができた。WWL 国際会議は道内各地の8校の生徒が参加し、道外からは福島県や長野県の高校や教育委員会が視察に訪れており、200名程が参加していた。また、北海道大学大学院 地球環境科学研究所 山中康裕先生をはじめ、株式会社 JTB 北海道事業部など各大学や企業も参加していた。E. LABO の発表は実験やその結果から科学的な視点で SDG s にどのように取り組むかを示し、将来の展望まで提示できていた。

発表後、成果発表会に参加してくださった高校等から、非常に高い評価を頂くことができた。高度な内容を高校生でも取り組むことができるように行っていること、そしてそれが今後どのようにつながるかを考察していることに注目が集まっていた。生徒たちも多く苦労があったが、発表会を終えて大きな達成感を感じているようであった。1年生は来年度、理系を選択しに学習を深め、来年度もぜひ参加したいという生徒も複数人いた。また、3年生は今後の大学生活での取り組みに希望を膨らます良い機会であった。このことより、E. LABO の取り組みの意義や成果を感じることができた。



5. 参加生徒アンケート

○調査日 2024.12.12 (THU) ～12.17 (TUE)

○調査対象者 ENGINEERING LABO 参加生徒 (43 名)

- ・社会環境工学科 12 名
- ・建築学科 15 名
- ・電子情報工学科 6 名
- ・生命工学科 10 名

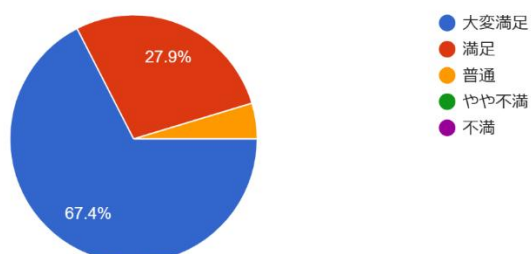
○調査内容 ①調査項目 8 つ (円グラフで表示)

②アンケート (記述式)

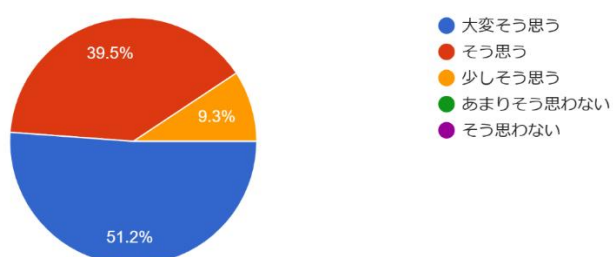
※学科ごとに表示

① 調査

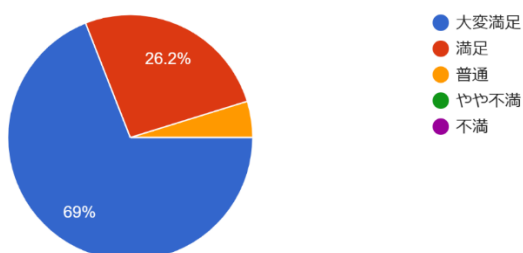
ENGINEERING LABO 全体を通じた満足度
43 件の回答



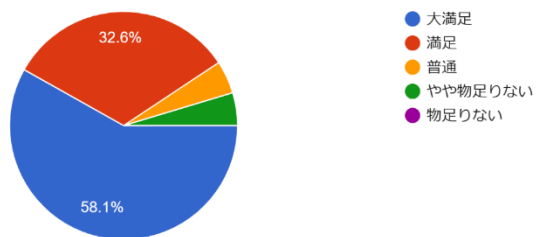
北海学園大学工学部への理解は深まりましたか。
43 件の回答



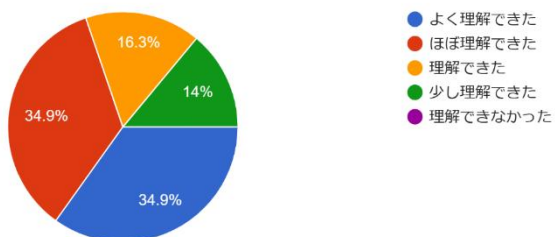
第1・2回 工学部での実習について 満足度
42 件の回答



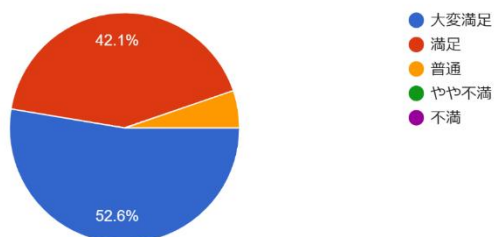
第1・2回 工学部での実習について 内容のレベル
43 件の回答



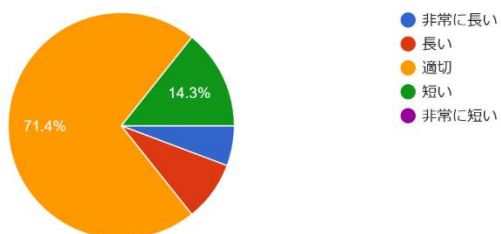
第1・2回 工学部での実習について 大学の先生の説明は理解できましたか。
43 件の回答



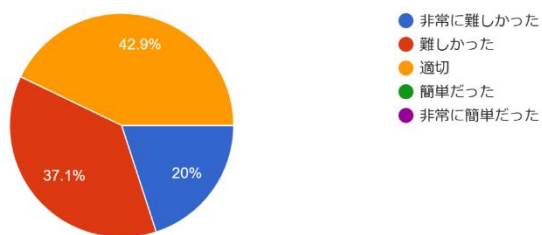
成果発表会（E.LABO のみ）について 満足度
38 件の回答



成果発表会について 準備期間
35 件の回答



成果発表会について プレゼンテーション作成の難易度
35 件の回答



② アンケート

I. 北海学園大学工学部の先生へのコメント…省略

II. ENGINEERING LABO 全体の感想・印象に残ったこと…一部抜粋

社会環境工学科

- ・橋の構造のしくみを理解するのがとても大変でした。パスタを使って、橋をつくるのはとても難しかったですが、とても楽しかったです。このような機会をつくってくださりありがとうございました!!
- ・「工学部」と聞くと難しい物理を想像して私には絶対無理だと思ったが先生のわかりやすい授業や友達と話すことで解決につながったこと。改めて人に思いを伝えて考える良さを実感しました。三角形や四角形といった図形は面積を求めたり計算するだけだと思っていたが、立体にすると「ゆがみにくさ」があるということが印象的だった。発表会で知らない単語がたくさん出てきて話についていけなかったのもっと理科を学びたいと思いました。来年も参加したいです。
- ・印象に残ったことは実習です。実習から橋がどうしても重い物が上に乗っても耐えられるか知ることができ自分の成長につながりました。意見は特になく満足のいく体験だったと思います。その他には来年参加するときにしっかり発表できるか心配です。
- ・パスタで橋を作るのが楽しかった。スピーチが上手くできていて良かった。
- ・橋の耐久に関して理解できた。多くの人の前で話す経験ができて良かったと思う。先生が頼りになる。
- ・パスタブリッジを通して「想像のたのしさ」を学ぶことができた。
- ・プレゼンづくりではグループになった人たちとコミュニケーションを積極的にとり楽しく作成することができた。
- ・パスタ橋の実習とても楽しかったです。パスタには曲げ方で強度が変わることに驚きました。高校生国際会議の発表がとても興味深く面白かったです。
- ・自分は社会環境でしたがパスタで橋を作るのがとてもしょうげきてきだったことと、パスタコンテストが楽しかったのとどの橋が優勝するのかを考えるのが面白かった
- ・みんなで载荷コンテストを行ったのが印象的でした。また、大学の知識にも少し踏み込んで学べたのがいい経験になりました。高校生国際会議では様々な話を聞くことができて非常に勉強になりました。
- ・自分が行く学部と、違う学部の授業を体験することができてとてもいい経験になりました。また、受験のプレゼンはすごく緊張しましたが、今回のプレゼンは受験の時よりも50倍ぐらいの人がいたのに、全く緊張せずにプレゼンできたこともいい経験になりました。ほかの学校の地域おこしなどの話も、世の中にはいろんなことに挑戦している人もいるんだなと思いました。
- ・エンジニアリングラボを通じて1番印象に残っていることはパスタブリッジの载荷コンテストで優勝したことです。同じ材料でも組み立て方一つでこんなに変わるんだなと思いました。橋に四角形よりも三角形がたくさん用いられている理由に納得できました。もし、また橋について学ぶのなら実際に行ってみて橋の上を歩いたりするのがあるともっと楽しい学びになると思いました。来年もまた参加したいです!

建築学科

- ・ヒンメリ作り、ストローとヒモの二つの材料しか使っていないのに立体的でおしゃれなオブジェクトが作れることに衝撃を受けました。・建物に自然を入れる、という一見簡単そうですが難しくまた今の人たちは自然に触れる機会が減ってきているのでこのような事をしている人やその考え方に興味しました。
- ・印象に残ったことの1つ目は、学校生活に入って初めての他学年と交流したことで先輩とのコミュニケーションのとり方や先輩に分からないことを聞いてよりエンジニアリングラボの理解を深めることができたことです。2つ目はヒンメリ制作、展示したことで色々な場所の雰囲気が少し良くなったと感じることが出来ました。3つ目は、この活動を知らない人に分かりやすく広めるためにもっと光と風があることでどう印象が変わるのかを説明できるようになるためにもっと理解を深めたいと思いました。
- ・糸と紙ストローだけであんなにしっかり組み立てられるのはすごいと思いました。接着剤を使わないので環境に良いのがすごくいい事だと思いました。光や風を上手く利用した建物が世界には沢山あって楽しかったです。
- ・私は建築科志望なのですが、建物の中にいたら自然を感じることは正直あまりないですが、窓の位置や大きさを工夫して、大きな物体を置くことで時計が代わりにすることで、中でも自然を感じることができたり人とのコミュニケーションが増やすことができるってとても素敵だなと感じました。
- ・そこら辺にある建物も色々な工夫がされているとより実感した。建物における工夫を実感し、特に光や風が空間を豊かにする重要性を学びました。今回良い経験になったので来年も参加したいと思いました。
- ・印象に残ったことは、ヒンメリというものがあつたことを知らなくて、その存在を知ってから家に持ち帰って部屋に飾っています。とてもいいです！来年もあつたら参加したいです！発表の機会もあつたらしたいです！
- ・体験が楽しかった。先生の話は為になった。友達と交流できた
- ・大学生と体験できて楽しかったです、みんなで意見を出し合うことで先輩との仲が深まった。
- ・伝統的なものと近代的なものを結びつけるデザインは魅力的だった。
- ・建築にも動きを取り入れると全く印象が変わること。
- ・めっちゃ楽しかったです。去年はなんとなく参加したが、今年は具体的な進路も決まっていた中での参加だったので、ここでの体験がどれだけ自分に大切なことなのかをよく理解できました。また、最高学年ということもあって、自分たちがチームを引っ張っていかないといけないという自覚も芽生えたと思います。2年間ありがとうございました！
- ・他学年の人と交流することができてとてもいい経験になりました。1人で最初は不安でしたが先生やグループの人が話しかけてくれたりしてくれて安心してこの期間を過ごすことができた。三澤教授の「建築には正解も不正解もない」という言葉が間違えることが恥ずかしい私にとってとても印象に残りました。
- ・大学の授業を通して建築についての知識を学べたことが深い学びにつながった。

電子情報工学科

- かなりレベルの高い内容だったけれど先生や先輩のおかげでうまくできた。パワポを作るのは慣れていなかったけれど先輩が教えてくれたおかげでできた。ランダムレーザーと一緒に普通のレーザーの仕組みも知ることができた。
- 私は今回の活動を通して普段は出来ない様々な経験をする事が出来ました。そこ中でも特に印象に残ったことは、1 つ目は実験です。学園大の実験室にお邪魔し、スイッチっぽいものを押したり、パソコンでグラフを作った事が楽しく、特に印象強かったです。実験時は理解度が低い状態で参加してしまい、自分がなんのデータを取ってグラフにしていたのか正直よく分かっていませんでしたが、その後のプレゼン作りで何となくではありますが自分のやっていたことの意味を少し理解出来たこともあり、それも印象強く残った理由だと思います。2 つ目はプレゼンがある程度出来上がり提出してから訂正です。自分の中では良いプレゼンが出来たと思っても、藤原教授や、小笠原先生方のご指摘を沢山頂き、高校生の求められるプレゼンのハードルに驚きました。そしてその中でも、自分たちが分かっていることを相手もわかっていると思い込んでしまいがちな感じの指摘にとっても納得し、このことはこれからのプレゼン作りや、日時生活などの自分の考え方に組み込んで行きたいととても感銘を受けました。次に意見です。今回私は電子を選択し、ランダムレーザーについて学びましたが、内容がとても難しく全ての講義を受けプレゼン資料を作った後ですが、しっかりと全て理解しているかと言うと怪しい部分が多くあります。最初の方の藤原先生の講義でも、物理基礎履修中の1年生は習っていない共振器や波動性など、ランダムレーザー以前に理解が難しいものが多くあり、プレゼン作りもとても苦労しました。もちろん私の学が低く、事前により調べたりすれば良かったとは思っていますが、他のチームのプレゼンを見てみると、もう少し簡単な内容でも良いのではないかと思います。ですが、今回のラボを経験して、私は今まで工学部にはあまり興味がなかったり、理系には進みたかったものの、物理か生物かで悩んでいましたが、物理に進みたいという思いが強くなり、工学部や光にも興味が出てきました。なので今回は先輩方や、教授、先生方の手厚いサポートがあったからこそではありますが、ある程度難しい内容に挑戦するのも経験としてはしておいて良かったと本当に思います。最後に小笠原先生、種田先生、菊地先生、短い期間でしたが、本当にありがとうございました。1年生の段階でも、こんなにも貴重な経験をする機会を作っていただきありがとうございます。電子を選択肢して本当に良かったです。
- 大学で習う専門分野はとても難しく大変でした。プレゼンテーションを作る時に先輩や一年生と理解を深めあったりしてパワーポイントを作るのは一体感があって発表の時に達成感を感じやってくれたって思いました。大学との連携のイベントみたいなことは貴重な体験で今後も参加したいと思いました。
- レーザーに関してパワポにまとめるのが大変だった。実験を通して少しですがレーザーの特性を理解することができた。他の学校の発表を聞いて学べることが多かったです。
- 実習の難易度が高いと感じた。発表会の雰囲気は真面目で良いと思った。ほかの大学の発表を聞いていて、どこもレベルが高いと感じた。

生命工学科

- 大学がどのような場所なのか、授業の内容はどんなことをやっているか、などの新しい体験ができよかった。今回、自分はスライドを作り発表することはなかったけど、いろいろなまとめ方や伝え方があり良い経験ができた。SDGS には限界はあるけどそれでも自分たちにはまだできることがたくさんあると思うのでこれからの生活でいろいろな考え方を活用していきたい。
- PCR 検査はコロナの検査の時だけ使うものだと思っていたが、そうではないと知り身近なものでも他の使い方があるのかなと思ったので、自分の当たり前にとらわれず当たり前なことでも改めて調べてみるのも大事だとわかりました。また、実験を通して仮説をたてたり結果からどうしてこういう結果になったのかを考え自分たちの考えを広げ、それを SDGs などの環境問題に繋げ自分たちには何が出来るのかを考えて未来の日本に繋げていかなければいけないなと思いました。
- 工学部がどんなものかわからなかったけど、実際に大学の中に入れたことで実態を掴むことができた。高い実験器具を使えたので良い経験になった。
- 学年関係なく課題に取り組めていいと思う。
- 朝顔に西洋朝顔と日本古来の朝顔があるということがいんしょうにのこった。今回実験で行った PCR 検査は出生前診断にも使えると考えたのも印象に残った。PCR 検査は出生前診断にも使えるなら癌や難病などを発見する検査にも使えるのかなと考えた。E.LABO を通して PCR 法だけでなく 3 年生とコミュニケーションをとることも出来たしパワーポイントの使い方も学べていい経験になったのでこの経験を活かしていきたいです。
- 研究を続けていくことでたくさんの方がわかり色々な技術などが発展していくと思いました。そのため研究とは継続して続けていく必要があると思いました。また、ひとつの技術が発展することによって他のことも発展することがあると思いました。最後は、古くから伝わるものは守っていくことの大切さを知れました
- 高校では体験できない本格的な研究ができて良かった。仮説や考察を立てる時に、独りよがりにならずにグループの仲間と比較して自分と違う意見の人にどうしてそうなったかを聞いて自分が考えられなかったことも知ることができた。最初は研究活動を上手く進められるか自信がなかったけど、研究員の方々の手厚いサポートのおかげでスムーズに進められた。ただ研究して結果を出すだけでなく、研究したことをこの先どう活かせるのかも教えてもらって、将来に役立てたいと考えた。
- 今まで理科の実験でマイクロチューブやマイクロピペットを使うことは無かったので、とても貴重な体験が出来ました。中でも、ゲルに注入するのが難しくて楽しかったので印象に残っています。他にも、北海学園大学工学部生命工学科の設備を実際に見せていただく機会があり、その時に見た機械や光を遮断していて壁紙まで黒い部屋が印象に残っています。高校では見られないものばかりだったので勉強になりました。
- まず、身近にあるものの詳しい構造などを知る機会が貰えて嬉しかった。その中で、生物の基礎で習ったような知識も応用として出て来ることから、学校での勉強にはしっかり意味があることを再確認した。

6. ENGINEERING LABO 実施後の理系生徒の動向

「1. はじめに」にもあるように、E. LABO のねらいの一つとして、理系選択生徒の増加があげられている。表2より、現2年生（HGS20期生）の理系科目選択生徒は全体の11%であり、ここ数年の平均値からも大きく離れている。今年度のE. LABO参加生徒の中で2年生はいないことから、理系科目への興味関心を広げることができなかったと言わざるを得ない。

現1年生（HGS21期生）の科目選択が終了し、今後多少の変更はあると考えられるが、理系科目選択生徒数がでた。その結果を表3に示す。今年度の1年生の理系科目選択生徒数は昨年度に比べて+5%の16%ではば例年通りの値となっている。

表2					表3				
2024年度 2年生 理系選択者（2024.4）					2024年度 1年生 次年度理系希望者（2025.1）				
	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度		2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
生物	27	37	54	21	生物	37	54	21	39
物理	23	39	53	22	物理	39	53	22	27
計	50	76	107	43	計	76	107	43	66
生徒数（2年生）	382	384	493	388	生徒数（1年生）	384	493	388	413
理系割合	13%	20%	22%	11%	理系割合	20%	22%	11%	16%
	ELABO 1年目	ELABO 2年目	ELABO 3年目	ELABO 4年目		ELABO 1年目	ELABO 2年目	ELABO 3年目	ELABO 4年目

今年度はE. LABO参加希望者46名（参加者43名）となっており、1年生の希望者が30名近くいた。これは、1学年の先生方の声掛けのおかげであると考えている。工学部長の植松先生との話でも、小学生から高校生くらいまでは大人の働きかけが重要であり、きっかけになるという話が出ていた。全くその通りで、生徒への声掛け次第で興味関心の入り口を示すことができる。今後、継続的に理系生徒数を増加させるためには、教員の働きかけが重要であると考えている。学校として理系選択生徒の増加を望むのであれば、行動に移さなければならないと考える。

E. LABO開始前後（4年間年度平均）の動向を表4に示す。理系選択者が極端に少ない学年もあったが、開始前と開始後では2%の変化があることが読み取れる。これはE. LABOの開催が生徒の自然科学に対する興味関心を高め、その結果、理系科目選択に大きな影響を与えていると言えるのではないだろうか。

表4		
E.LABO開始前後の理系人数		
4年間年度平均	開始前	開始後
	2017～2020	2021～2024
特進 生物	20.0	20.0
特進 物理	15.0	26.3
総進 生物	30.5	46.0
総進 物理	30.0	40.8
計	95.5	133.0
生徒数（2・3年生）	659.0	805.3
理系割合	14.5%	16.5%

7. おわりに

様々な方々のご協力のおかげで、ENGINEERING LABO 2024 も成功に導くことができた。また、今年度は過去 3 回の反省を生かし、より生徒にとって実りある取り組みになったと感じる。さらに今回は 4 学科とも大学生が学生チューターとして参加していた。これは、高校生にとっては未来の自分の姿を想像するのに絶好の機会となった。また、本校の卒業生の学生が顔を出して手伝ってくれた学科もあった。生徒達も E. LABO を通じて、大学での学習には今の高校での学習が大切であることができた。また、コミュニケーション能力やリーダーシップ等、様々な面での成長をすることができた。今後も生徒たちの視野を広げ、自然科学についての興味関心を持ってもらうためにも、この事業を継続、発展させていきたいと考えている。

ENGINEERING LABO 2024 を開催することにあたり、北海学園大学工学部長 植松武是先生をはじめ、社会環境工学科 金澤健先生、建築学科 三澤温先生、電子情報工学科 藤原英樹先生、生命工学科 新沼協先生には多大なるご協力をいただきました。日常の業務でお忙しい中、本校生徒に学習機会を与えてくださったこと、高校生にもわかりやすいような授業や実習を展開してくれたこと、生徒に科学や工学の面白さを伝え、導いてくれたことなど多岐にわたりご協力を頂けたことに感謝いたします。また、生徒の引率や写真撮影、プレゼンテーション作成など協力をいただいた、理科教諭の菊地先生、数学科教諭の種田先生にも感謝申し上げます。そして、ENGINEERING LABO 2024 にご協力くださいましたすべての方々に、お礼を申し上げます。

2024 年度 未来に語り継ぐー19 歳の軌跡ー 知里幸恵の生涯を学ぶ 実施報告

長山 美咲

1. はじめに

【参加生徒】 2-C 近藤舞衣 2-C 門馬史杵

【担当教諭】 大西修夫 長山美咲

【活動内容】 アイヌ文化を後世に残した知里幸恵の生涯を学ぶことを通して、民族共生について学びを深めることを目的に勉強会やフィールドワークを行った。

2. 活動報告

【活動スケジュール】

4 月	プロジェクトメンバー選出
5 月	勉強会開始(1-2 週間に 1 回程度)
6 月	フィールドワーク (「札幌市アイヌ文化交流センター」を訪問)
8 月	フィールドワーク (「銀のしずく記念館」を訪問)
9 月	シナリオ制作開始
10 月	白老東高校交流 民族共生象徴空間ウポポイ見学 (北門中学校 知里幸恵郷土資料室見学) グローバルコース研修旅行(3 週間のアメリカ ポートランドへの留学)
11 月	パワーポイント制作開始
12 月	高校生国際会議に向けての発表練習・発表

今回、参加希望者を 2 年 C 組(グローバルコース)で募ったところ、2 名の生徒が参加を申し出た。活動は 5 月から開始し、1～2 週間に 1 回のペースで勉強会を行った。本校図書室にある書籍や映像を活用し、アイヌの歴史や知里幸恵の生涯について幅広く学習した。

6 月 23 日(日)には南区小金湯にある「札幌市アイヌ文化交流センター」を訪問し、アイヌ文化について深く学ぶ機会を得た。さらに、8 月 5 日(月)には登別の「銀のしずく記念館」を訪問し、知里幸恵が書いた手紙などの展示品を鑑賞した。また、記念館理事長の松本徹氏との対話を通じ、知里幸恵の生涯についてさらに理解を深めた。

後期からは高校生国際会議での発表準備を開始した。まず日本語でシナリオを作成し、それを英語に翻訳した。その後、生徒たちが主体となりスライドを作成する。本番ではアイヌ民族の衣装をレンタルして着用し、英語で発表を行った。発表では「アイヌ神謡集」の冒頭部分をアイヌ語と英語で朗読した後、アイヌ民族の歴史、知里幸恵の生涯について、彼女が幼少期から亡くなるまでをまとめて紹介した。また、プロジェクトを通じて学んだことや感じたことについても述べた。最後に「アイヌ神謡集」の序文を日本語で朗読し、発表を締めくくった会場では、発表に共感して涙を流される方もおり、大きな拍手をいた

だいた。

3. 担当教諭として感じたこと

ニュージーランドの高校では知里幸恵について授業で学ぶということを皆さんご存知だろうか。しかしながら、日本では知里幸恵のことをあまり知らない人が多いように思える。実際、恥ずかしながら私自身も本プロジェクトに関わるまでは知里幸恵の生涯について詳しく知らなかった。そこで、参加生徒とともに知里幸恵が生涯を通して残したものについて学び、民族共生の在り方を考える機会にしたいと考えた。また、高校生国際会議の場を通じて、少しでも多くの高校生に知里幸恵のことを知ってもらいたいという思いで、年度初めから生徒たちとともに活動を行ってきた。

今回のプロジェクトに参加したのは、非常に優秀で意欲的な2名の生徒であり、どちらも自ら参加を希望した。初めの段階では、2人ともアイヌ民族の歴史や文化に興味を持っていたものの、知里幸恵については私と同様、あまり知らない状態からのスタートであった。学習の流れは次のとおりである。「先住民として暮らしていた頃 → 明治維新以降の富国強兵、北海道開拓の歴史とアイヌ民族の生活環境の変化 → 衰退 → 知里幸恵の存在 → 現在」この学習を通じて、生徒たちは開拓者として入植した先祖への思いやアイヌの人々が受けていた苦難の歴史、また、知里幸恵が10代後半のころに経験した出来事(金田一京助や村井曾太郎との出会いなど)について知り、同世代としての共感とともに多くのことを考えさせられたようである。

さらに、この2名はグローバルコースに所属しているため、10月に3週間のアメリカ・オレゴン州ポートランドでの研修にも参加した。ポートランドでの留学は、彼女たちにとって異文化理解の重要性を実感する貴重な機会となった。ポートランドには多様な人種や文化背景を持つ人々が生活しており、彼女たちはその環境を実際に体験する中で、自分たちのルーツを再認識するとともに、異なる文化や背景を持つ人々が共存し、互いを尊重し合う仕組みを学んだ。この3週間の海外での経験と年度初めから取り組んできたアイヌの歴史や文化全般、そして知里幸恵の生涯についての学びが相乗効果を生み、彼女たちを大きく成長させたと感じている。約1年にわたる学びや体験を通して、彼女たちはアイヌ民族を含む多様な文化を尊重し、民族共生社会の実現がいかに重要であるかを理解しただろう。未来を担う彼女たちが、明るい未来づくりに大きく貢献することを期待している。

4. 生徒感想

2年C組 近藤舞衣

私がこの学習を通して学んだことは、どんなに苦しい思いをしても、諦めずに努力し続けることで、成功をすることが出来ると知ったことです。そして、新しい言語を覚えたり書き留めたりすることは大変なのに本にまとめるということはすごいと思いました。そして、頑張ったからこそ今も歴史の一部として残り、多くの人々に知れわたることが出来るのは本当にすごいし、これから先もこの学習を通して学んだことを多く

の人に知ってもらいたいと思いました。知里幸恵がいたから、私たちはアイヌについて知ることが出来るのだと改めて思いました。

2年C組 門馬史杵

私はこの度アイヌプロジェクトに参加し2つの経験を得ることが出来ました。1つ目はWWL関連の行事として参加出来たことです。私は今までWWL関連の行事に参加したことがなく、また大学内で大勢の前で英語とアイヌ語を使って発表することは人生の中でそう多くないため、良い経験になったと言えるでしょう。2つ目は知里幸恵及びアイヌの方々について深く学べたことです。彼女達の歩んできた人生は私たちが見習うべき思想や考え方が多く、未来に向けて記録として残ったことに感謝です。もし興味があっても今後自ら調べることは無かっただろうと思います。それらは私にとって素晴らしい経験となりました。これらの経験を今後の人生に活かしていこうと思います。最後にご協力いただいたお二人の先生に感謝をこの場を借りて伝えさせていただきます。ありがとうございました。



WWL 探究活動発表会兼高校生国際会議

小林 真史

1. はじめに

WWL コンソーシアム構築支援事業の完成年度となる令和6年度、同事業の最後を締めくくる WWL 探究活動発表会兼 WWL 高校生国際会議を、北海学園大学を会場として令和6年12月12日（木）と同年12月13日（金）に開催した。

170名の生徒と14名の留学生、3名の大学院生による参加があり、当事業最後にふさわしく過去最大規模のものとなった。



2. 報告

12月12日（木）午前は、本年度の探究活動の発表会が行われた。

開会式では、山中康裕運営指導委員長のご挨拶、事業拠点校の竹越広志校長の挨拶があり、進行は事業拠点校インターナショナルクラブの生徒によって、すべて英語と日本語と両言語で行われた。発表会に参加したのは事業拠点校からは、12チームが、事業連携校は7校7チームが参加した。なお、参加チームは以下の通りである。



【WWL 探究活動発表会参加チーム】

（1）事業拠点校

- ①全国高校生フォーラムチーム
- ②フードロス探究チーム（札幌保健医療大学と連携）
- ③北方領土探究チーム（根室高等学校と連携）
- ④アイヌ文化探究（白老東高等学校・平取高等学校と連携）
- ⑤SDGs × 農業チーム（酪農学園大学と連携）
- ⑥3年グローバルコース生
- ⑦2年グローバルコース生

- ⑧エンジニアリングラボ（北海学園大学工学部社会環境工学科と連携）
- ⑨エンジニアリングラボ（北海学園大学工学部建築学科と連携）
- ⑩エンジニアリングラボ（北海学園大学工学部電子情報工学科と連携）
- ⑪エンジニアリングラボ（北海学園大学工学部生命工学科と連携）
- ⑫アイヌユカラ・知里幸恵探究チーム

（２）事業連携校

- ①北海高等学校
- ②札幌日本大学高等学校
- ③北海道白老東高等学校
- ④北海道平取高等学校
- ⑤北海道標茶高等学校
- ⑥北海道帯広農業高等学校
- ⑦北海道富良野高等学校



（３）視察ならびにご協力

- ①福島県ふたば未来学園中学校高等学校
- ②長野県教育委員会

各チームが春から探究を続けてきた課題とその考察結果をパワーポイントを使用しながら発表した。広大な大地・北海道を探究活動という形で繋ぎ、相互に信頼関係を構築しながら学びを深化させてきた発表ばかりであり、きわめて有意義な機会となった。

すべての発表を終えたあとは、山中康裕運営指導委員長（北海道大学大学院教授）、佐藤友彦運営指導委員（JTB 北海道教育旅行センター所長）、事業協働機関を代表して上村英二委員（岩田地崎建設株式会社部長）に講評をいただいて、発表会を終えた。

同日、午後からは WWL 高校生国際会議となった。

まず初めに運営指導委員長の北海道大学大学院の山中康裕教授による SDGs 基調講義から高校生国際会議がスタート。

「私たちは全員は、等しく、新しい試みに挑む挑戦者です」というスローガンを設定し、緊張の面持ちとともに会議に臨む高校生にエールを送り、2030年の地球のために私たちができることを、SDGs と関連付け講義を展開した。



ひと言、付け加えておくが、山中運営指導委員長には、当会議の実施にあたり、多忙な大学での業務のなかにあつて多くの時間を割いていただいた。協力者となる留学生の手配、留学生からの80ページにおよぶ高校生へのSDGs課題書 "Road to 2030 and Beyond: Witness to the Global Environment"の編集、そして、参加生徒が1か国でも多く

の情報を得られるようにと配慮しながら作成したワークショップ編成、ひと言では表現できないほど多くのご助言と情報提供をいただいた。

SDGs 基調講義を経て、生徒は次のプログラムに移動。"VISIT THE WORLD 1"に参加した。当プログラムは、グローバルサウス出身の留学生12か国14名が7つの会場に分かれて待機。高校生は、4名から6名のグループとなって、指定の国を訪れワークショップを行った。

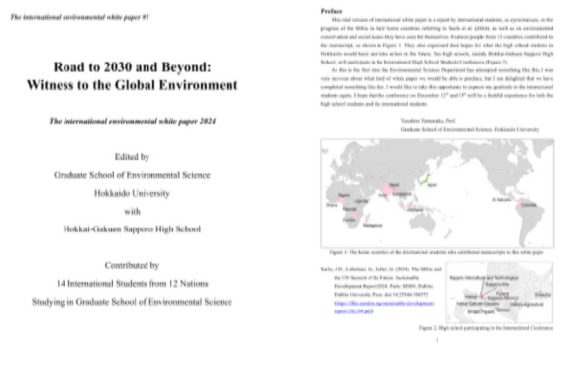
留学生からは出身国が抱える環境、貧困、自然破壊、公害、ジェンダー等の社会課題"Road to 2030 and Beyond: Witness to the Global Environment"を受け取り、日本の高校生が社会課題に対する解決策を英語で提言した。また、留学生の母国事情を知り、いっそう関心が高まったようで、積極的に英語で質問する光景が各会場で見られ実り多き時間となった。こうして WWL 探究活動発表会兼 WWL 高校生国際会議の初日を終了した。

翌12月13日（金）、WWL 高校生国際会議の2日目のプログラムを実施した。

この日は、前日の最後に行ったプログラム同様"VISIT THE WORLD 2"を行い、前日と異なる出身国の留学生の母国事情を学び、高校生は留学生の出身国の社会課題に対する解決の道を提言することを試みた。

参加した高校生のほとんどが、グローバルサウスの出身者との接点が無かったため、とても興味深く、学びの視点も明確であったため積極的にコミュニケーションを図ろうと試みる態度が顕著であり、有意義な時間となった。プログラム終了後も留学生に質問をし、好奇心を満たそうとする高校生が多数いたことも付け加えておく。さらに、ここで参加していただいた留学生の出身国を留めておく。

- | | |
|----------|--------|
| ①バングラデシュ | ②コロンビア |
| ③エルサルバドル | ④ガーナ |
| ⑤インドネシア | ⑥インド |
| ⑦マダガスカル | ⑧ネパール |
| ⑨ナイジェリア | ⑩ルワンダ |
| ⑪ウガンダ | ⑫ザンビア |



2 部屋 4 か国を訪問し、社会課題の解決の重要性を実感した高校生は、次のプログラムで7つのグループに分かれてワークショップを行った。ここでは他国を訪問した生徒グループと出会い、さらに自分たちが獲得している情報や社会課題への解決策などを共有した。そして、これらのなかから共通項を辿り、この共通項をグローバル課題ととらえて、さらなる課題解決への道を求めて話し合いを深めた。



ワークショップの後半は、「ふりかえり」の機会とし、これまで獲得してきた多くの情報（8カ国から10カ国の情報）を各グループごとに話し合いながら整理統合し、グローバル課題の解決へ向けた道という総括をして英語と日本語で発表した。

昨日は公務のため出席がかなわなかった運営指導委員の酪農学園大学 飛谷淳一教授も研究室の学生2名とともに出席され、生徒の発表を聞いていただいた。

7グループによるグローバル課題解決のための提言後は、北海道大学大学院の根岸淳二郎教授に講評をいただいた。根岸教授は高校生が非常に意欲的にグローバル課題を自分事ととらえて考え行動したことと英語運用面での努力を評価していただき、また、コミュニケーションスキルアップを訴えた。



こうして、2日間の大事業を無事終えることができた。

3. おわりに

WWL 探究活動発表会兼 WWL 高校生国際会議に出席した高校生の声に耳を傾けると必ずといっていいほど、

「楽しかった」

「また実施してほしい」

であった。例年6月に東京で開催されている WWL・SGH 連絡協議会の出席者からも参加生徒の声として、多数報告されていたことと同じ声が、ここ札幌においても聞けたという点で心から安堵している。



来年度からこれまでの4年間実施してきた各事業を自走しなければならない。この点

においては、今回、視察にお越しいただいた長野県教育委員会の皆さま、視察にお越しいただき、あつかましくもプログラム進行にご協力をお願いし、快くご協力いただいた福島県ふたば未来学園中学校高等学校の皆さまと今回お会いして情報交換ができたことは本校にとって財産である。

最後に、当会議の企画・運営にあられた皆さまに心からお礼を申し上げ、報告としたい。



WWL コンソーシアム構築支援事業
Snow Crystal Project in HOKKAIDO

高校生国際会議 2024

兼 探究活動成果発表会

2024年12月12日(木)、13日(金)

管理機関: 学校法人 北海学園

事業拠点校: 北海学園札幌高等学校

	12月12日(木)	場所		12月13日(金)	場所
8:00	受付 (8時30分受付終了)	7号館 4F D402	8:30	受付 (9時受付終了)	8号館 2F B211
8:30	運営指導委員会・検証委員会 ALネットワーク 会議		9:00	VISIT THE WORLD②	8号館 2F
8:50	休憩・移動・準備終了		10:05	休憩	
8:55	探究活動発表会・高校生国際会議 開会式 ①運営指導委員長ご挨拶 ②事業拠点校ご挨拶 ③事業拠点校生徒によるウェルカムスピーチ ④事務連絡	7号館 3F D30	10:20	ワークショップ① グローバル課題を考える	
9:10	探究成果発表①		11:40	昼食・休憩	7号館 3F D30
10:30	休憩		12:35	移動	
10:40	探究成果発表②		12:50	ワークショップ② グローバル課題への提言 生徒による質問・意見・感想	
11:30	事業拠点校によるアイヌ研究レポート		15:00	休憩	
11:55	評価・講評		15:10	閉会式 ①運営指導委員長ご挨拶 ②事業拠点校ご挨拶 ③事業拠点校生徒によるお礼の言葉	
12:10	昼食・休憩・移動		15:20	終了・解散	
12:45	高校生国際会議 開会宣言 基調講演 山中教授				
13:50	移動・休憩	8号館 2F			
14:10	VISIT THE WORLD①				
15:15	事務連絡				
15:20	解散				

【事業協働機関】

北海学園大学、北海商科大学、北海道大学大学院環境科学院、酪農学園大学、日本医療大学、札幌保健医療大学、北星学園大学短期大学部、北海道、札幌市環境局、独立行政法人国際協力機構北海道センター（JICA 北海道）、北海道農業研究センター、公益社団法人北方領土復帰期成同盟、札幌ニュージーランド協会、株式会社国際開発ジャーナル社、株式会社 JTB 北海道事業部、岩田地崎建設株式会社、北海道キリンビバレッジサービス株式会社

【事業連携校（参加校）】

北海高等学校、札幌日本大学高等学校、北海道帯広農業高等学校、北海道標茶高等学校、北海道平取高等学校、北海道白老東高等学校、北海道富良野高等学校、北海道札幌国際情報高等学校、北海道札幌北高等学校

【ご協力】

福島県立ふたば未来学園高等学校、長野県教育委員会、北海道大学留学生の皆様

12月12日(木) 探究成果発表会スケジュール

発表順	発表校・テーマ	生徒名
1	北海学園札幌高等学校 全国高校生フォーラム2024 『Ratio of Male to Female Students in Global and Medical Courses ～Influence by history and surroundings～』	佐々木 晃英 安藤 快翔 稲垣 璃音 三橋 歩大
2	北海学園札幌高等学校 フードロスチーム 『How to use up!』	吉田 麻佑子 稲葉 雫 輪島 天音
3	北海学園札幌高等学校 北方領土チーム 『北方領土のために今できること』	荒谷 妃奈 末国 心美 宮西 蒼空
4	北海学園札幌高等学校 アイヌ探究チーム 『探求 アイヌの生活・文化 ～歴史とSDGsをつなぐ～』	伊藤 奈央 押野 遙音 加藤 風花 前川 結 本間 健太郎 森下 真衣
5	北海学園札幌高等学校 SDGs×農業チーム 『学札の周りで畑はできるのか？ -WWL 農業フィールドワーク 2024-』	米倉 優衣 静 望羽 富澤 ひなた 土谷 美音 若林 瑚子 湯浅 南美
6	北海学園札幌高等学校 2-C 『Reuse of Used Cooking Oil』	堤 祥詠 林 滉人 古本 一斗
7	北海学園札幌高等学校 3-C 『Homes of the Future』	岡田 吏欧 櫻下 瑠也
8	北海学園札幌高等学校 ENGINEERING LOBO① 社会環境工学科チーム 『橋が力を支える仕組みから考えるSDGs』	林 諒輔 加藤 佑奈 菊地 美晴 秋田 暁征 和田 端琉 大村 悠
9	北海学園札幌高等学校 ENGINEERING LOBO② 建築学科チーム 『空間において光や風を感じるということ』	石川 翔太 遠藤 慎介 田村 蓮 吉川 秀佑 長尾 唯香
10	北海学園札幌高等学校 ENGINEERING LOBO③ 電子情報工学科チーム 『ランダムレーザーから考えるSDGs』	野口 卓弥 清野 柊貴 武嶋 大成 深瀬 雄大 村岡 甲太郎 吉崎 瑠那
11	北海学園札幌高等学校 ENGINEERING LOBO④ 生命工学科チーム 『PCR法を用いた形態類似植物の種識別 ～PCRから考えるSDGs～』	川島 結愛 黒瀧 孝太郎 坂田 快生斗 村井 実結 菊地 希望 大谷 愛菜
12	北海高等学校 『ジェンダー』	片瀬 飛翔 佐藤 新二郎 田中 純志 松田 龍之介
13	札幌日本大学高等学校 『Disaster prevention and evacuation order for foreigners visiting Japan』	鏡 莉歩 都築 楓太 吉田 凱星
14	北海道白老東高等学校 『地域課題の解決へ向けて 「ウボボイ来場者を町内へ」』	五十嵐 妃葵 西小野 秋泉 船越 菜々子 堀部 京華
15	北海道平取高等学校 『共生社会の実現を目指して』	大島 鈴 長安 良春 村下 陽音 森田 琴美 横野 萌虹 吉井 雄飛
16	北海道標茶高等学校 『まだ見ぬ標茶へ』	菊地 美晴菜 藤川 美沙 山賀 瑛太
17	北海道帯広農業高等学校 『挑戦！秋まきコムギの可変播種技術の開発 ～播種量と地形が収量に与える影響を探る～』	氏家 幸矢 小島 武琉 中村 仁美 仁木 峻太郎
18	北海道富良野高等学校 『富良野の知名度調査とプロモーション方法の検討』	石黒 幹太 伊達 結月 久保 怜靖 斉藤 暢彦
	事業拠点校によるアイヌ研究レポート 『未来に語り継ぐ-19歳の軌跡-』	門間 史杵 近藤 舞衣

高校生国際会議 各校ROOMリスト

【12/12(木)、12/13(金)】 ※ ○ 内は8号館教室番号です。

VISIT THE WORLD① 12/12	ROOM	VISIT THE WORLD② 12/13
Bangladesh(B204)	1	Indonesia(B211)
Colombia(B211)	2	Madagascar(B212)
EL Salvador(B206)	3	Nepal(B213)
Ghana(B212)	4	Nigeria(B203)
India 1(B213)	5	Rwanda(B205)
India 2(B214,215)	6	Uganda(B207)
India 3(B209,210)	7	Zambia(B209)

ROOM NO.				学校名	名前
World①	World②	ワーク①	ワーク②		
5				北海高等学校	片瀬 飛翔 佐藤 新二郎 田中 純志 松田 龍之介
6	4	2	3	札幌日本大学 高等学校	鏡 莉歩 都築 楓太 吉田 凱星
7	1	4	1	帯広農業高等学校	中村 仁美 氏家 幸矢 小島 武琉 仁木 峻太郎
1	4	3	2	白老東高等学校	五十嵐 妃葵 西小野 秋泉 船越 菜々子 堀部 京華
2	2	4	2	平取高等学校	大島 鈴 森田 琴美 横野 萌虹 長安 良春 村下 陽音 吉井 雄飛
3	7	2	1	富良野高等学校	伊達 結月 石黒 幹太 久保 怜靖 斉藤 暢彦
4	4	4	5	標茶高等学校	菊地 美晴菜 藤川 美沙 山賀 瑛太
2	3	7	3	札幌国際情報 高等学校	神田 ひなた 相川 優奈 上松 菜々美 鈴木 日那
7	2	5	6	札幌北高等学校	谷田 愛莉 小濱 歩希果 中谷 庵史 大和 連
1	1	1	4	3-C①	岡田 吏欧 櫻下 瑠也 佐藤 心実 杉本 怜央奈

ROOM NO.				学校名	名前
World①	World②	ワーク①	ワーク②		
2	6	2	1	3-C②	岡山 虎鉄 佐々木 晃英 佐々木 昂平 高橋 歩翔
3	4	1	6	3-C③	植村 梨央 木藤 雅 佐藤 彩子 湯浅 彩愛
4	1	2	6	3-C④	岩本 心結 幸野 紗羽 沼倉 花風 松本 美柚
5	5	2	2	3-C⑤	伊藤 優希 鈴木 柊斗 戸田 颯太 松本 フランク
6	2	6	5	3-C⑥	安藤 快翔 岸部 翔剛 永田 琴梨 マッケンジー輝 湯澤 李里香
7	6	3	4	3-C⑦	小椋 慧晴 古俣 悠人 山本 祐斗
1	2	7	7	3-C⑧	大越 涼 菊地 梨希 富澤 ひなた 米村 栞那
2	7	6	6	2-C①	奥澤 悠奈 近藤 舞衣 門馬 史杵
3	5	6	4	2-C②	大畠 陽香 久保 友香 和田 理名
4	2	1	3	2-C③	小笠原 智 加藤 葵 金野 咲桜 東海林 風花
5	6	7	6	2-C④	伊藤 笑瑠 重本 華澄 服部 咲弥 万行 穂乃花
6	3	3	1	2-C⑤	小山田 千紘 秦野 紗有 三浦 可加里 村岡 美玲

ROOM NO.				学校名	名前
World①	World②	ワーク①	ワーク②		
7	7	7	2	2-C⑥	新宮 日和
					吉本 詩野
					大河原 凧海
					湯川 総夢
1	3	5	5	2-C⑦	大野 宙
					土屋 遼大
					堤 祥詠
					南保 誠
2	1	3	5	2-C⑧	袴田 陽良
					林 滉人
					古本 一斗
					溝口 凜久
5	1	5	7	アイヌ探究	3-D 伊藤 奈央
					3-D 押野 遙音
					3-G 加藤 風花
					3-G 前川 結
					3-G 本間 健太郎
					3-G 森下 真衣
6	5	1	7	北方領土	1-A 荒谷 妃奈
					1-A 末国 心美
					1-B 宮西 蒼空
					1-C 熊谷 飛慧
					1-C 米川 航平
					1-I 佐藤 陽菜乃
4	3	6	2	FOODLOSS	1-E 山田 咲希
					1-E 渡邊 美沙季
					1-I 稲葉 雫
					1-I 輪島 天音
					1-H 工藤 新菜
1	5	4	3	高校生 フォーラム	2-D 稲垣 璃音
					1-J 三橋 歩大
3	6	5	7	SDG s 農業	3-B 米倉 優衣
					3-B 静 望羽
					3-F 土谷 美音
					3-G 若林 瑚子
					3-G 湯浅 南美
3	3	2	7	インターナショナル①	1-A 門脇 心海
					1-H 高坂 琉世
					1-E 榎木 竜斗
					1-J 中川 遙
4	7	3	4	インターナショナル②	1-B 橋本 茉白
					1-B 吉田 麻佑子
					1-D グレン 城音
					1-B 小林 健介
					1-D 渡部 優弥
5	4	5	6	インターナショナル③	1-G 田谷 巴那
					1-J 太田 恵夢
					1-A 大溝 優斗
					1-H 澁谷 勇丞
					1-H 田村 柚人

ROOM NO.				学校名	名前
World①	World②	ワーク①	ワーク②		
7	2	7	5	インターナショナル④	1-B 米澤 龍真
					1-D 川森 友翔
					1-J 奥村 美月
2	5	6	1	インターナショナル⑤	1-B 桑原 莉奈
					1-A 山田 光流
					1-A 表 憲伸
					1-J 菅原 美優瑠
6	6	4	3	インターナショナル⑥	1-B 瀧ヶ平 騎来
					1-H 平賀 凜隼
					1-I 渡邊 歌乃
					1-J 雛田谷 紗知
2				エンジ`ニアリング`ラボ` ①	3-A 林 諒輔
					3-E 加藤 佑奈
					3-E 菊地 美晴
					3-E 野口 卓弥
3				エンジ`ニアリング`ラボ` ②	3-E 石川 翔太
					3-E 遠藤 慎介
					3-E 田村 蓮
					3-E 吉川 秀佑
4				エンジ`ニアリング`ラボ` ③	3-M 長尾 唯香
					3-F 清野 柊貴
					3-F 武嶋 大成
					3-D 川島 結愛
1				エンジ`ニアリング`ラボ` ④	3-D 黒瀧 孝太郎
					3-F 坂田 快生斗
					1-A 秋田 暁征
					1-A 和田 端琉
1				エンジ`ニアリング`ラボ` ⑤	1-A 片岡 梨里
					1-B 大島 咲桜
					1-B 長島 夕奈
					1-B 長久 楓佳
6				エンジ`ニアリング`ラボ` ⑥	1-B 横山 祥子
					1-H 大村 悠
					1-I 葛西 龍登
					1-I 佐藤 陽菜乃
7				エンジ`ニアリング`ラボ` ⑦	1-I 吉崎 瑠那
					1-B 宮本 龍之介
					1-D 中野 心瑚
					1-D 坂東 芽依
6				エンジ`ニアリング`ラボ` ⑧	1-E 谷永 大地
					1-I 川口 馳埜汰
					1-I 中村 聡太
					1-I 柳井 旺采
7				エンジ`ニアリング`ラボ` ⑨	1-E 深瀬 雄大
					1-E 村岡 甲太郎
					1-E 池田 慧汰
5				エンジ`ニアリング`ラボ` ⑩	1-A 村井 実結
					1-D 菊地 希望
					1-G 大谷 愛菜
					1-J 村上 結衣子

WWL コンソーシアム構築支援事業 Snow Crystal Project in HOKKAIDO ステイクホルダー 一覧

運営指導委員会	委員長	山中 康裕	北海道大学大学院地球環境科学院教授
	委員	百々瀬 いづみ	札幌保健医療大学保健医療学部栄養学科教授
	委員	飛谷 淳一	酪農学園大学准教授
	委員	加藤 洋平	北海道教育庁学校教育局高校教育課主任指導主事
	委員	Matthew Cotter	北星学園大学短期大学部准教授
	委員	佐藤 友彦	株式会社JTB北海道事業部札幌教育旅行センター所長
検証委員会	委員長	森 雅人	前札幌大谷大学社会学部教授
	委員	前田 輪音	北海道教育大学札幌校准教授
	委員	蛭川 隆介	北海道新聞社論説主幹
カリキュラム アドバイザー	大西 修夫		
事業連携校	北海道高等学校	北海道白老東高等学校	
	札幌日本大学高等学校	北海道平取高等学校	
	北星学園女子高等学校	北海道標茶高等学校	
	札幌聖心女子学院高等学校	北海道帯広農業高等学校	
	旭川志峯高等学校	北海道根室高等学校	
	札幌北斗高等学校	名古屋大学教育学部附属中高等学校	
	稚内大谷高等学校	北海道富良野高等学校	
	函館白百合学園高等学校	北海道釧路明輝高等学校	
		北海道旭川東高等学校	
	ウエリントン ハイスクール	コンコーディア ミドルスクール	
事業協働機関	北海道	札幌市	
	北海道大学大学院地球環境科学院	株式会社 JTB 北海道	
	岩田地崎建設株式会社	公益社団法人北方領土復帰期成同盟	
	北海道農業研究センター		
	独立行政法人国際協力機構北海道国際センター		
	株式会社国際開発ジャーナル社		
	北海道キリンビバレッジサービス株式会社		
	札幌ニュージーランド教会		
	オークランド大学	ポートランド州立大学	
	札幌保健医療大学	日本医療大学	
	北星学園大学短期大学部	北海学園大学	
	北海商科大学		
管理機関	学校法人北海学園		
事業拠点校	北海道学園札幌高等学校		
	校長 竹越 広志	教頭 天沼 和哉	松田 尚
	事務長 河村 洋行		
	国際教育連携部	小林 真史	マーク ホロウェイ
		坪岡 英明	長山 美咲
		沼田 彩花	三浦 琢斗
		倉内 哲	藤井 貴浩
			長勢 正人
			倉内 瞳
	グローバルコース	マーク ホロウェイ	竹林 佑里子
		長山 美咲	
高大連携事業			
エンジニアングラボ	小笠原 裕介	菊地 浩太	種田 楽

